

川柳雅証

麻生路郎☆主筆

四月號

No. 359

Pensoj flugas trans la land-limon
THE SENRYU ZASSHI



昭和十二年四月一日発行第七十二卷第四号（四月一日発行）
創刊大正十三年・通巻三百五十九号

尾崎方正医博 渡米送別川柳會

★注意

本句會は午
後一時から

五月の
本社
句會は

一題 兼一

「片親」
「粗品」
「裏返し」
「年上」

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

川柳雜誌社句會部

電話住吉(六)八一

★有志送別小宴——開会後、同会場に於て 会費三百円

★投句のみの方は郵券三十円
同封のこと(〆切毎月五日)

会呈句柳席
費賞評話題

兼題 場所 日時

光明寺 (電話⑦九二六〇)
大阪市天王寺区下寺町二丁目市バス停前
(市電下寺町又は日本橋三丁目下車)

四月七日(日)午後一時

「耳」 (三句) 麻生路郎選
「鼻」 (三句) 西尾栗選
「祝盃」 (三句) 黒川紫香選
「見送り」 (三句) 富岡淡舟選
三題(当日発表)

★各題天位 麻生路郎
★路郎選天位に不朽洞賞
五拾円 北川春巢

幹事 紫香・淡舟・賀峯・いさむ・雄声・堰子
与呂志・白水・東洋男・竹莊・愛論・一三夫

川柳雜誌社句會部

電・住吉⑥六〇八一

不朽洞會員尾崎方正医博が来る四月廿日前後に空路渡米の途につかれるので本社の四月句會はその行を壮んとするため渡米送別句會とした。万障繰合せて御出席を請う。



お酒に...

NESTON

お酒の前後にお忘なく

ネストンはメチオニン
タウリンに四種のビタ
ミンを含む六種複合剤
です。酒前・後の
二・三錠はお酒がおいし
く、のめ二日酔悪酔を防
ぎます。

疲労回復にも!

携帯用 (二〇粒) 一〇〇円
実用装 (六〇粒) 二七〇円
郵便用 (二〇粒) 四八〇円

この春いちばんの呼びもの

あやめ池 大自然探検博



3月21日▶5月26日

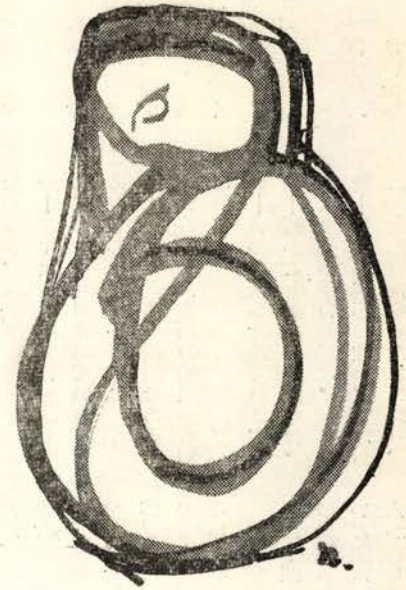
★宇宙旅行と海底探検大パノラマ館 ★南極探検館 ★大自然博物館
★大自然の驚異パノラマ館 ★マンモス群の野外大パノラマ
★南極観測船宗谷大模型 ★象やライオンなど数百種の大動物園
★動物サーカス ★遊園地一帯の遊戯機
★あやめ池円型大劇場 松竹歌劇団「春のおどり、全20場」
★野外劇場 日曜・祝日 アトラクション開演
入場料 130円(大劇場「春のおどり、とも」)

★日曜と祝日にあやめ池に停車する臨時特急増発ノ

近鉄 あやめ池遊園地

不 朽 洞 帖

麻 生 路 郎



ワンマンの夫へからみついて生き

ワンマンカーやもめ暮らしに似ておかし

片親のない淋しさが絵に走り

この春を落第ちた子だけが部屋にいる

胸病んで女いよ／＼女らし
文楽座で「種彦」を聴く

いつ死んでもいいと云うとこまでは来た

漱石を読んでいますと露がのび

いすれゆく待っててくれという仲か
久留美を懐か

一九五七・四月

四月号目次

題 字	麻生 路郎
表 紙	野尻 弘
不朽洞帖	麻生 路郎 (三)
川柳家の二十四時	延原句沙弥・中島生々庵 (四)
自 衛	西島 〇丸 (五)
陽春茶ばなし	戸田 古方 (六)
「私達」から	東野 大八 (三)
川柳漫筆	後藤 梅志 (三)
新川柳鑑賞	八木摩太郎 (三)
笑いと川柳	麻生 路郎 (三)
紫香を語る	中島 可十 (三)
これでよいのか	路郎・霞乃 (四)
床	潮花いさむ (四)
久留美君の	金井 文秋 (三)
事 ども	木山 遠二 (三)
久留美君を憶う	麻生 路郎 (三)
安川久留美先生	船木 夢考 (三)
急逝のこと	伊藤 茶仏 (三)
青ペン赤ペン	不二田 三夫 (二)
句集「私達」	出版記念会の夕 (二)
看 の 名	木村 十悟 (二)
廿四時裏ばなし	愛妻 物語 (二)
子連れ出席	子連れ出席 (二)
★	
川 柳 塔	麻生路郎選 (六)
同 舟 近 詠	諸 家 (二)
近 作 柳 譚	北川春集選 (六)
一路集「鳥籠」	正本 水客選 (三)
金 泥 集	八木摩太郎選 (三)
各地 柳 壇	麻生霞乃選 (三)
川柳第二教室	
作句指導	戸田古方 (三)
不朽洞会から	
柳界展望	
編集室から	



紫香を語る

現代版「むつつり右門」

一 達人 語 一

麻生路郎
麻生路郎
丸尾潮花
菊田いさむ

司会——きょうは霞乃先生の六十五回目のお誕生日ですが、この日に黒川紫香氏を語る座談会を開くことは意義深いものがあります。恩師としての路郎先生、霞乃先生。小学時代からの竹馬の友としての潮花氏。職場と趣味の先輩として尊敬しているいさむ氏と、役者がそろったところで、霞乃先生から幕を開けていただきます。

返事をしないからといって、いやにするのではないのですね。むつつり、右門という役どころでしょうか。

潮花——頼まれると嫌やと言えない気の弱いところがある。

路郎——そういう人に金を借りに行くんだね。(笑)

霞——無い袖は振れぬ位いは言うでしょう。(笑)

いーイヤよく貸しては返えしてくれないと、コボされていることもありました。(笑)

潮——彼は非常に子煩悩である。孫もいるし今は幸福の絶頂かも知れない。

い——いつも何か考えていますね。潮——何かがあると涙ぐむ。

路——しかし、芯は強い。でなかつたら会社で役をもたされたり、句会部の責任者なんかにはなれないからね。

潮——あれでなかなかユーモリストなんです。

い——旅行のプランを樹てるのはうまいもんです。バス、電車、汽車、船と非常に乗物をうまく利用するので会社でも有名です。

路——句会のアランなんかもうまいよ。

潮——その旅行プランで思い出し、月ヶ瀬へ行った時は、時間の計り損いで真暗になってしまつて、梅が見られなかったことがあった。夜桜には雪洞(ほんぼり)が点いているが、夜梅には一本参りました。あれで日記もつけているし、キッチリ屋です。

い——愛妻家でもあるし……

路——酒もあまり飲まないから女の失敗もなく、奥様からみればいいご主人だね。潮花君のように婦人からレターもこないだろうし。

潮——先生、わたくしも愛妻家です。紫香君に負けない位です。

水客君も愛妻家だし、この三人組はその点よう似ています。三人寄っても飲む相談はせず、ぜんざい食べようか——という甘い方です。

司会——一つ少年時代の話を聞かせてください。

潮——水客君、紫香君、僕の三人は「中津第一小学校」時代からの学友でした。小学校の頃は、あまり紫香君とは遊ばなかった、というのは、その頃の彼は、僕より背が相当大きかった。大体こどものころは、ノッポとチビは遊ばなかったようです。四、五人連れの子供たちを見ても、やはり今でも背の高さが同じようなのがそろっている。

い——紫香さんは、そんなに大きかったのですか。

潮——中位いかな。僕が小さ過ぎたのでしょう。(笑)

い——いまの紫香さんは小さい方ですのね。

潮——背が伸びずに顔だけ大きくなりよつてな。(笑)

卒業する時、どこへ行くのかと訊ねたら、例によって何も言わなかったが、次ぎ逢った時はちゃんと阪急で給仕をしてました。

路——三十何年間勤続ということをこの前来たとき聞かされて驚いたよ。阪急の生字引的存在だね。

潮——十五、六才のころ同人雑誌「トンボ」を発刊した、その頃からすでに文学の芽は伸びていた。

ある同人が「脱走」という赤がかった作品を発表して、警察から調べにこられたり、家へ帰っても刑事が来ているように思つて、十三の河原で日がトツブリ暮れるまで頭を抱かえてビク／＼したことがあった。その後「文の雫」というのを出しましたが、その頃から三人は川柳をやりだしたのです。早作りの練習もその頃ともにやりました。

い——いまの紫香さんは小さい方ですのね。

潮——先生、わたくしも愛妻家です。紫香君に負けない位です。

い——いまの紫香さんは小さい方ですのね。

潮——先生、わたくしも愛妻家です。紫香君に負けない位です。

い——いまの紫香さんは小さい方ですのね。

潮——先生、わたくしも愛妻家です。紫香君に負けない位です。

いさむ——よい意味でいうお人好しです。職場でもうるさい仕事を頼みにゆくと、返事もせずその仕事を片付けてくださるが、別に

司会——趣味は文学一本ですか

潮——水客君の御父君と共同で劇場を経営していた父をもつ彼はよく芝居を演つたものです。水客君とは親戚関係にあつて、彼のお母さんは三味線も弾くし、いわば芸道に生きる両親をもつた彼でしたから、芝居なんかなかなか堂に入つたものでした。「曾我対面」では大敵きの工藤を演つた。僕は五郎と舞鶴の二役をしました。

潮——優しい五郎ですね。
「山崎街道」では紫香君の定九郎、僕の与市兵衛。
い——初演定九郎の仲蔵以来の名演でしたしょうね。(笑)

路——紫香、水客両君の御尊父が経営していた「福井座」なら僕もよく知っていますよ。
潮——風葉君(故人、元不朽洞会員)が脚本を書いて全十五場という大作で、途中で時間がなくなつて、その日に片付かなかったのがあつた。芝居の出来んものは幕引きをさせられました。(笑)

い——野球も好きですね。
潮——よく他へも試合に行きましたが、僕はもっぱら記録係でスコアブックを掲げてついで行つたものです。50対0で負けたことがあつたが、まるでラグビーのスコアみたいだった。あんな荒い試合にはソロバンを持って行かぬと点が

何点入つたのかわからなくなる。

い——紫香さんのボジションは？
潮——キャッチャーです。

司会——これで、先刻、路郎先生が芯が強いと言われたことがわかりました。小西得郎張りて言うなら、コレハ、ナント申シマシヨウカ、捕手とは強肩にして強打、沈着にして果敢を生命とするだけではなく、よく一軍の支柱として扇の要的存在でなくてはなりません。紫香氏を知る好材料を得ましたが、次は作品に就いて。



影 近 の 氏 香 紫 川 黒

乞食にも喰わす嫌いがある
と見え
信号を待つ間に馬はよそ見
する

い——虫や動物の句が多いですね
路——箕面に住んでいたこともあ
るだけに虫の句は確かに巧い。

い——句会で、虫の題が出ると、
あゝまたやられる。と、もう作句
ができなくなります。

潮——虫が好かんのやな。(笑)
い——虫のなかでも蛙の句は特に
お得意のようですね。

霞——土の匂いにする句が多いよ
うですね、潮花さんとは対照的作
家という感じです。

菜の花の中に役場があるば
かり

二三匹蛙は川へ逃げ損ね

て来

戸をあける音さへ違う長女
次女

司会——ではこのあたりで幕にし
たいと思います。ご多忙のところ
有難うございました。

——カットは青年時代の紫香氏——
(司会・筆記・二三夫)

☆ ☆ ☆ 愛妻物語

——座談会寸筆——

「紫香を語る」座談会の日、霞乃先生のお誕生祝いに藤村梨花さんも来られた。こと愛妻物語になると、霞乃先生も梨花さんも、男って口がうまいわネ——といった顔つきで、もっぱら聞き役にまわられる。

相当のサイノロである筆記子、「ウチの女房は、三枚目女優清川虹子そっくりで、二年ほど前、大阪日日新聞の「爪二つ」という、カコイもの(同じタイトルで毎日連載されるもの)に写真入で記事になったり、今年も大阪テレビのあるスポンサーから出演交渉を受けるなど——」とヤニ下つたものであるが、惜しむらくは山本富士子や伊東絹子に爪二つでなかった

ことである。

「君い、君の奥さんを語る座談会じゃないよ。鉛筆まではり出していい気になつてもらつては困るじゃないか」と、路郎先生からご注意をうける始末。

「ちよつとぐらい言わせてあげなさいよ」と、霞乃先生。

「では愛妻物語の座談会をいつか開いてあげようかね」

「その時は潮花さんの代りに奥様に出ていただくのですね」と、これはおつくしい梨花さんにしてはシラツツな言葉だ。

「早よ梨花さんも愛妻物語に語ってもらう方を見つくるのですね」と、いさむ氏は潮花氏のために一と肌脱ぐ。この人も相当サイノロらしいと筆記子はみた。(F)

お酒の前後に...

メルチオB12錠

25錠 150円
55錠 300円
100錠 500円

二日酔・悪酔
肝臓疾患...





桃色の遊戯じゃ足らぬ長寿法

実弟

大死になった弟殊動甲

サウル市 前山北海

テンエージャーに親は物事知らな過ぎ
忙しきかこち会長やめもせず
死するより生きる辛さを子が支え

死するより生きる辛さを子が支え

サウル市 内藤草一郎

豊中市 戸田古方
大学教授じみな万年筆をさし
うろちよろうちよろ道は近きにありながら
ふんまえた石がうごいたあわてよう

大阪の子供は雪をうれしがり
酒うれし訪ね甲斐ある友なりき
豆炭の炬燵でしかも後差しで
雪の駅宿の迎えのゴム長よ
人伝に親に逆けず嫁たと聞く
就職の出来ぬ悲しい毀往症
この部屋の暖房煉炭只一つ
歳は争えず若さの美にうたれ
頭髪は延び放題で外科の医者

大阪市 市場没食子

むつとして出ればマツに蹴つまずき
ニールック物を言わないまゝがよし
補聴器が儲け話ヘトーンを上げ
貯めましたなれど詩もなく趣味もなく
ワイシャツの汚れ別れたなと思ひ

東京都 宮田不二

教え子の賀状淋しい嫁き遅れ
宣伝カー今日は納税期をどなり
少年の声援がありこう仕切る
とてもよく出来た子でした遺族泣く

とてよく出来た子でした遺族泣く

ホフル市 築山快夢起

グランパと呼ばれおゝ俺の事かいな
嫁き後れ華道指南の影淋し

ホフル市 白砂旋風

資本家におこぼれ貰う株を買い
オールドミスあせり出したか厚化粧
帰化市民一票をすぐ欲しがられ

大阪市 須崎豆秋

寒うても金魚みたいに眠て居れず
日本人やたらにソースかけたがり
気狂が治つてもとの不埒

馬鹿な子に焼香をさすいじらしき
釣をする根気で恋をし給えな

大阪市 正本水客

温泉にきてまで小言ばかり言う
無事着いたハガキをピンでとめて置き
あきらめて呉れとは女うぬぼれて
入院してゝも浮気まだ止めず
肩書の未練たらしく元と言う

真直ぐに白衣の前を通りすぎ
レンコートでとう／＼冬を押し通し
黙ってるのは味方と見倣しとく
山へ行く親子の靴の音そろろ
金屏風しまうに離れから呼ばれ
干竿の一番上に僕のもの

淋しいと言う口癖を覚えられ
街の灯に逆らうように歩を運ぶ

スト済んで社長いつもの顔になり
寒行の音の遠さ八月がさえ

池田市 黒川紫香

芸道のはげしさ言わす羨まれ
母さんに言えば予算がありません
猫の逢曳油煙をつけたまゝ帰り
生きのいい魚で五勺きりの酒
撥置いて女夜風の窓をあけ
奥さんに知れたらうちが死んだげる
歳だけに見られて女腹がたち
染替えて気に入るまいが二女三女
背な丸うすくめて妻に叱られる

大阪市 丸尾潮花

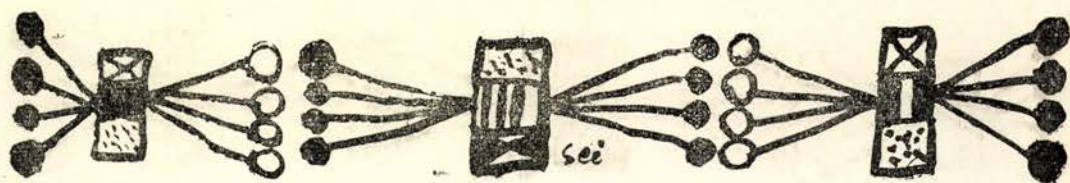
酒やめなはれと言いたい顔で見舞に来
ひどいわとうれしく唇を盗ませる
染め直し知らん振りして褒めてやり
差引けば鶏糞売っただけの益
今朝読んだ社説社長は訓示にし

西宮市 若本多久志

酒やめなはれと言いたい顔で見舞に来
ひどいわとうれしく唇を盗ませる
染め直し知らん振りして褒めてやり
差引けば鶏糞売っただけの益
今朝読んだ社説社長は訓示にし

新発田市 高沢一浪

口ハ酒で巻舌になる街のボス



追いつめて袂でぶつただけのひと

皮切りにやれと扇をにぎらされ

父ちゃんがもうこわくないほど惚れて

掌で抜毛まるめる淋しい日

そっちから来ねば出かける帯をしめ

妓から廊下の雨へ呼び出され

恋へ嫁すひととも見えぬ角隠し

米価据置うちのかまども煙たつ

人形も恋をしている臓をつむり

大阪市 北川 春 巢

長男と出る日は妻に見送られ

疲れたの謎で酒出す妻を持ち

あれば飲む僕と同年なじことを言う

奈良県 尾崎 方正

振られたる顔へ二月の風強し

おしきせをうだく云うて呑むも春

岡山県 浜田 久米雄

病院にて

つるし上げのように見舞に取り巻かれ

検温の時間見舞をだまらせる

大阪市 菊沢 小松園

兄弟の見分けが附かぬ程に禿げ

亡娘三周忌

あゝしてもやれたとおもう子を死なし

大阪市 福田 妄夢

長女の反抗口とンがらすだけ

人も殺せるナイフとは書いてなし

喧噪と錯乱の中に生きてる瘦せている

出雲市 尼 緑之助

喘息の治った声で葉を植える

これからは貯金もします子の便り

大阪市 水谷 竹 荘

素人になって嬉しい市場籠

府中市 弘 津 柳 慶

談論風発昔ながらの恩師にて

感情もあらわ眼鏡をやたら拭き

鳥取市 杉 谷 湖 山

闘いを始める服と脱ぎかえる

君が代の批判に今日も亦暮れる

兵庫県 小 西 無 鬼

朝酒をかくすマスクの白過ぎる

ほんとうの姿淋しい素顔の妓

会社初午祭

飲む事のダシに神様都合よし

尼崎市 小 林 文 月

かなづかい妻の手紙を添削し

住去家を買いたくもあり借家人

大阪市 富 岡 淡 舟

おのろけになり主婦の会閉会す

勇退と言われる肩の淋しすぎ

叱るのに娘と息子では違い

はっとけば娘屋まで寝るつもり

奈良県 飯 降 白 香

待ってネと女なかなか現われず

或る時は邪魔者みんな殺したく

気狂になりたいときもある生活

山口県 長 野 井 蛙

市に編入されても猪は無頼着

女とは人目がなければすぐ甘え

基地返す声に地元があわて出し

出るところへ出れば女は負けていす

生きていて欲しいと恩給当にされ

食通は何を出してもケチをつけ

日給だけ置き去りにしてみな騰り

懷手して形勢を傍観し

呉市 林 野 甕 光

新妻の渡す靴の手がぐねり

春景色の中へ洋館無駄に立ち

布施市 森 下 愛 論

セールスマン子へやる飴も持ち歩き

言い難い事は代書屋察してい

スポンサーがついて銚子は林立し

出雲大社にて

新婚にシャッター頼まれあてられる

日御崎燈台へ

燈台の下はするめが干し竝び

岡山県 直原 七面山

小遣を父の二号にねだれる娘

雨の日は遅出の出来る良い身分

もう良いのに寝てろくと親心

元将校と聞いて見直すドアーマン

死の影が頑固親父のあのやさしさわ

僕に似た猿がおるから動物園は止そう

波静かなり我が身を投ぜんか

金あればこそ牛の歩みに似た暮し

羊羹を食べくラブレターの代筆

夜泣きそば屋と語れば昔技師長で

色恋の道に長けてゝ世に出です



七十になつて恋愛の店じまい
逢曳へ時計の針を合せあい
ライバルの犬まで僕をにらみつ

大阪市 西森花村

満員車腹のお粥が逆流し

赤ん坊の手相見ている若き父
ねんねこの中へ赤ん坊溺れそう

給料日給仕も判の掃除をし

初孫のその所有権祖父と祖母

「猛犬に注意」残して夜逃げする

眼が覚めた様に終電よく走り

鳥取市 河村日満

理屈ではそうだが恩を子に強いる

タクシーで帰れと姉に案じられ

兵庫縣 田代尋四

十代の娘ケロリとキスをさせ

老婆のとき／＼末を案じ居り

ブラカード之で妻子をささえとり

岡山縣 福島鉄児

白足袋へ雨脚なか／＼おとろえず

知らぬ間に妻が保険に入っていた

岡山市 服部十九平

泣けるから駅へは送らぬことにする

ビジネスとして寮長は洒落も言い

岡山縣 大森娛句楽

他人様の金預かって吞めぬなり

婚札へ入れたお金の額に触れ

筆筒屋で売約済みの多いこと

尾崎市 長谷川三司

舞扇こんな勝気な娘と育ち

兵庫縣 若林草右

繰越しのきかない金が壁を塗り

産制というに温泉まで出かけ

熊本縣 有働芳仙

もてゝいるわけはカメラと気がつかず

宝くじ買う顎骨がとがって居

草月流ですなへそうだと云っておき

斗病の永さへ角がとれてくる

才媛の妻が重荷になり始め

下関市 石川侃流洞

旅愁ふと壁の白さへ突き当り

妻注いで会社のモヤ／＼忘れさせ

広島縣 山田季替

下っ端の机彫刻だらけなり

机などいらぬ用事の社に務め

弁護士へ無駄を承知で金をかけ

大阪市 山本葉光

酒強く女に弱いのが社長

きりのない愚痴を返事をせすにきく

倉敷市 木村千容

ツンボウと話す彼も標準語

差出口しだいに自信失われ

いたいとこよう衝くまいとたかくり

女房の腕電髪で家を建て

人間の欲の深さを神みそなわす

簡単に割り切る男水くさし

そうつと来て座れば碁盤とりに立ち

底なしのお人好にも欲があり

倉敷市 田垣方大

口説くの男がすたるとはあわれ

降つてきて女将はしめたなと思ひ

百円は石で押さえて露天商

敷く気ないのに夫から敷かれにき

呑む方は代理をさせぬ課長さん

三度目の花見税吏もつらい役

石川縣 那谷光郎

映画へのロハは万障くり合せ

鉛筆のありがたを探す鉋屑

勝将棋惜しい所で急患者

もう酔うて借りモーニング気にもせず

出席の教読む万年筆の尻

ユーマもわからぬ妻にへそくられ

石川縣 野村味平

旅馴れて胃散なか／＼手放せず

二階借下の女房も無愛想

十万円蓄めるのにあももけち臭く

貫一もお宮もロケで沙やけし

雑談のうちにたくみな刑事眼

大阪市 木村水堂

他人様を素直に褒める齡になり

本当の仕事はコンマ以下がやり

日向ぼこ明治生れの顔揃い

堺市 八木摩天郎

修学旅行先生の方は鯛がつき

学校にも裏門があり金の量

倉敷市 相原一善

寒空で待つとは恋もつらからう

づけ／＼と言うのが好きとのろけられ

本妻は死を待たれてるとは知らず



釣上る迄のエサなり買つてやる
一人居れば梅も匂うて来る吾が家

岡山県 田村 藤波

役得の知らずに飲んだ爛ざまし
迷子の対面子も泣き母も泣き

岡山県 岡田 夜潮

言い訳をしたりされたり女客

同窓会に招待されて

教え子に教えられてる喜寿の齡

近道を襲う草の実総毛立ち

二杯目のうどん首巻脱ぎ捨てて

永年の囲炉裏に飽いて上京し

厚い札言われて百田恐縮し

一生に二度の銀婚式淋し

前身はサーカスだった銀狐

真うしろに坐つて禿をしみじみ見

茨木市 下山 清潮

故郷の母欠かさず餅は送つて来
救急車聞いただけでも走りそう

岡山県 本田 恵二朗

七十の御趣味金庫に艶ぶきん

金策の不首尾この世を冷たがり

のど仏だけ動かして声にせず

お人柄焼香振りにちら見え

大阪市 真鍋 一瓢

二代目は成金親は一心寺

定時制美しゆうして学ならず

三度目の妻を馭すのに身を削り

京都市 松川 杜的

ノイローゼ薬局さんも持て余し

アルサロの名刺大事に定期入
時代劇にむくなどと思う眼に出逢い

豊中市 村上 ゆずる

結局は左遷の椅子に深くかけ

土産屋の娘シャッターきつて呉れ

鳥取市 森本法泉水

掌家流感にかゝる

往診の注射は子供からはじめ

電報とどなつて飲み屋おこされる

大阪市 後藤 梅志

学校へ出せば子分をもうつくり

映画欄下に出ている尋ね人

赤い靴つられて買ったことになり

倉敷市 藤井 春日

パトロンのお越しかマダム現れず

獣とわかつた時はもう汚れ

客毎に妓連れてつてく

花活けてあげたに邪魔だと素気なし

岡山市 津田 麦太楼

後添の若さに曳かれ息が切れ

捨てられた女さきさきと口があり

半纏を着て後添いのまめくし

ふるさとの通せんぼうの風の糸

呑む真似をしいくお女將訊いてやり

米子市 小西 雄々

性教育雄しべ雌しべを聞きあきる

物量で射止めた妻でももの足らず

塩酸を買いにきた娘にどきつとし

川柳「松露」三周年

師の声を耳に残した皆生の湯

人格を立派に見せる髭をたて

岡山県 浜野 奇章

無理にとは言わぬとボスが来てすこみ

青二才社長へゆすらぬ口をきき

吹田市 橋本 幸男

新築に嫁の意見も聞いて建て

ラッシュアワー女の方が席を取り

女事務ジョッキへのびる腕も持ち

パチンコもやれて楽しい小市民

堺市 高崎 雄声

麻雀で貰った風邪をウツされる

晴れたから京へ出たのに牡丹雪

閣議最中に赤坂から電話

餅を焼く駐日インド大使館

梅へ来て子供に遊ぶ場処が無し

へそくりに足して貰つて春の服

春を病む女小鳥に何か言い

島根県 藤井 明朗

神武景気旦那はよりを戻すなり

子を叱る漫画なるほど面白し

切り売りの様に小説以下次号

寒月へ真昼の如く雪が積み

歯を磨く如く機械の掃除して

朝刊をなぐめに読んで出勤す

老師或る日社長課長にとりまかれ

老梅も花をつけたりなげくまじ

プラトニッククラブヘニコライ堂の鐘

借金があるので風邪を引かぬ冬



逢わせたい人に逢わせと医者帰り
三面の空巢の記事も春らしく

倉敷市 野田素身郎

女心とはおかしなものよ追えば逃げ

結婚は墓場だなんてまた孕み

真相を知ってるばかりに左遷され

抜擢の課長に尻をたたくられる

大阪市 木村十悟

脱衣籠二つ要るほど着ぶくれる

二次会もしょんぼり待って呉れた妻

四十は四五十は五十の女惚れ

伝説と思えど抜け穴覗いとき

大阪市 伊達堰子

たし炭のはぜたをしおにおいとまし

大阪市 不二田一三夫

寄せ書に貸しのあるのがぬけくと

とり乱さなかったのはお医者だけ

大阪の雪あわれにも泥となり

女だけ明治の型にはめたがり

書置はあわてたらしく誤字だらけ

兵庫県 酒井ひか平

本山と言う役僧の咳払い

貰われて行く子供後ろを振り向かず

倉敷市 長尾越鳥

北風へ男はかばうように立ち

次はもう花見の事に幹事ふれ

気がきかん連れのおかげで無事帰り

宇部市 津秋六花

十七の子のダイヤルが小うるさくて

神戸市 野村初甫

目印のたばこや今日は店を閉め
發起人もやっぱり月給順に書き

五十銭でラクダに乗った伊豆恋し

大阪市 金井文秋

本人が言うてる内気あつかまし

役員にされそうなので出て行かず

後家立てる強さが寄附もよせつけず

岡山県 戸田喜楽

逢いに行く積りのズボン敷いて寝る

金貸しの前へ小さく跪づき

唐津市 新岡回天子

生命は儘にならない医博死に

自家用車迄とは言わぬ妻の夢

家一つ建てて退職金はけり

岡山県 池田古心

呑みつぶす資産と知らず惚れて嫁し

東京都 石居高志

スタイルを気にし気にして女老い

頼むよと肩叩かれた荷の重さ

岡山市 土井雷山

入学の許可書が届く麗かさ

拗ねることのみが養子の武器にして

岡山県 三村柳風子

春近し旅行案内などを読み

里帰り娘の頃の癖を出し

大阪府 早川清生

玄関のベルを鳴らして押売来

自嘲とは知らず後妻も笑うなり

団体の客真夜中も湯にはいり

作家老い男を泣かす話書く

碧眼の無遠慮ジャパンに住み慣れて
間違つて手紙が行った人と添い

末の子で庭木へ愛着など持たず

浮気防止策に料理を習いに来

妻と行く映画はただの券があり

やっぱり出来ぬのか学芸大へ入れ

ぼろ着てて儲りすぎる話する

商人に嫁して食事を共にせず

婦人外交員木枯へ去る顔となり

すっからかんで新婚旅行から戻り

三号は逃げて二号に養われ

源聖寺坂織田作が出て来そう

貰いさえすればへ嫁きさへすればが米

増えるばかり村に鮮人さんが住み

商人でこんな小さな店で食い

振袖を着せれば鈴の音がする

戸籍面ばかりは二夫にまみえざる

日曜の関配宿直パッチで出

お世辞まで書いたクイズが当ってず

飛び込む気起さす魅力滝は持ち

神武って誰かと聞く子それよし

牧野博士を悼む

大阪市 武部若菜

間に合わぬ文化勳章恩に着せ

さけてもさけても人生の向い風

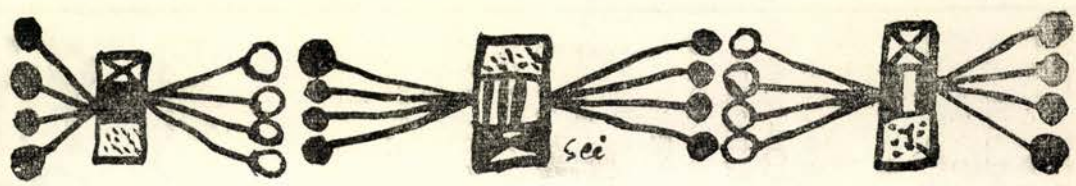
負け意地をあんなに張ったのがおかし

門松を仆し櫓が並べられ

堺市 辻圭水

どちらにも勝たしたいとはうまく逃げ

重要な会議葉書で通知来る



石川県 中松恒雄

顕微鏡覗けば蚤も指があり
買物を値切るに妻を連れて出る
皮切って骨を切られた敗戦史
春に花秋に月あり酒が飲め
景勝に住んで景色を意識せず

滋賀県 中島可十

人生の裏だと署長女好き
待遇をしてるつもりで端した酒
禿たのと白髪がひそと社長室
恐ろしや酔うて犯して無罪とは

大阪府 児島与呂志

養子もう帰る時間が狂い出し
童貞を大事にすぎたことを悔い
酔うてきて嘘がつぎ／＼よく続き

岡山県 野々口美舟

主婦の座もゆるがす亭主軽う敷く
姑へ義理で笑った一昔

神戸市 小浜牧人

一と杓の水薄命を悼むなり
社運盛り返して世界地図を掛け
香奠のように勳章授けられ
串カツで酔う人生に嘘がなし
受験期の疲れ果てたは女親

天理市 菱田満秋

連休を遊んで肥えてきた女工
入信をして門前に店を出し
鏡とは何と淋しいものを見せ
恋人を三十娘にして別れ

嫁かんでもいゝわに嫂ちとあわて

兵庫県 前川左文字
黒持って負けねばならぬことも知り
バスゆるる毎に美人の香がこぼれ

岡山県 池上知恵美

みんな風邪大時計まで寝てしま
大阪へ嫁くと十九の夢をもち
君を呼ぶ名も北風にさえざられ

大阪府 橋高薫風子

遠景に風あり松の内のどか
毛鉤一つ買うに六階まで上り
使用人と主人の区別猫も知り

大阪府 榎本路児

初午で午後休業と言う会社
ババばかり居るのに何にがアルサロや
子供から宗谷の使命おしえられ
停年と言うのに今日も又会議

大阪府 池戸桃村

俊工の案内ボスの名もまじり
時代かなパン食すきな嫁が来た

同舟近詠

大阪府 麻生葭乃

アベックで行けと映画の筋も言い
どわすれの踊へ糸もちととちり
お目ざめの御機嫌今日は零度以下

長野県 高峰柳児

日帰りのスキー吹雪を湯に浸り

デパートを出る事にする雨も止み
ひじ張って編み統けてる泥む電車
水薬粉薬不精髭みじめ

和歌山市 秋月宏方

句集「私達」を読んで
右へならえとどの句どの句も囁くよ
思うまいもう玉碎の地名など
共白髪男のような妻になり
万感交々皆句によせて生きる幸

大阪府 石田沐天

今更に暴露したとて舞台裏

今治市 長野文庫

実力に金が優先する不平
有権者さまを忘れてそり返り
スクターさえも高嶺の花なるか

今治市 月原宵明

通人と言われて春の河豚を食い
故郷の山を仰いで顔洗う
ケチが眼についてどうやら恋も末
冬の月恋の言葉を言いそびれ

新児童ヴァイオリン・サークル

講師 麻生アート

奈良県生駒町本町二丁目一〇三番地

生駒教室

TEL 306バン

西宮市仁川町五丁目七番地

くるみ幼稚園

TEL 638バン甲

★教室新設については新児童ヴァイオリン・サークル生駒教室へ御相談下さい



新川柳鑑賞

麻生路郎

〔三七九〕

磨かせてガム嚙んでいる紅い唇

(草 右)

アブレの女性を詠んだ都会風景のスケッチである。

「今、御出勤？」

と若い男が肩をたたいて行く

「アラ、今夜来てね」

と、流し眼を送っている。この種の女、靴を磨かせながら

も商売気は忘れない。

〔三八〇〕

子供好き田舎教師で世を終り

(万 古)

一方には坐り込みで騒ぐ先生もいるが、他方にはこんな教師もいるのである。子供好きが自分の出世などは忘れ、伸びゆく学童のために田舎教師として埋れたのを詠んだもので、軽い穿ちの句である。

〔三八一〕

ぺんく草かて春じやもの春じやもの

(一 豊)

も生えいでも、どうでもよいと思われるような存在ではあるが、春が来れば自然のめぐみに浴して小さな花もつけるのである。人間だって、そう

だよと云う諷刺がこの句から強く感じられるのである。

〔三八二〕

ネクタイにとろろをつけてやに下り

(麦太様)

とろろは老人趣味のものである。老らくの恋を動作のうちに婉曲に描写した句として秀れている。だらしなない態度が眼に見えるようである。

〔三八三〕

バラソルを放して娘抱擁し



陽春茶ばなし

東野大八

片手よさこい

「渡辺の綱にやりたいこの片腕を」

主と添寝の邪魔になる」

という景気のいよさこい節がラジオから飛出してきた。

このうたの文句に、私は思わずニヤリとして女房の顔をみた。残念ながらその女房殿、いま内職の機械編の難しいところで、それに気がつかない。

四本腕があつて向い合せになると、どう扱つても一本余計になる。それが私達には理想的に運ぶ。

「この点、便利だね」とそのとき笑つたことがあるが、女房

「そんなしづかなことより、思いきり抱いてもらつた方が、ナンボえゝやら……」

と色っぽく笑つたことだった。可哀想に彼女は、私につれそつて一度もその味を知らないでアル。いゝことは二つとはいえないものだ。

体験鑑賞

「寝て解けば帯はこんなに長いもの」

という古川柳がある。

一度兵庫帯をしめて家内に叱られたことがあるので古ネクタイに改めた。ところが時が時、場所が場所なので結び目が干し豆みたいに締つてしまつて、どうにも始末に困つたことがある。

ところで、この句を医者の方達に話したら

「診察台でよくあるね」

と共感してくれたが、極道者の友人は、こういつてニヤリとした。

「こんな奴はサービスが悪いよ」とそのとき笑つたことがあるが、女房

「そんなしづかなことより、思いきり抱いてもらつた方が、ナンボえゝやら……」

と色っぽく笑つたことだった。可哀想に彼女は、私につれそつて一度もその味を知らないでアル。いゝことは二つとはいえないものだ。



離婚するといゝ出したが、嫁の里では調査の結果、頭かきかきこう釈明した。

「娘にもたしてやつたあの方の秘画が、そういう形のもの一枚だけだったので、根がおぼこのあの娘は、それが普通と考えたのでしよう」

この話に、ムコ方も納得、話ほめてたく収つたが、春画はバラバラにすべからず、必ず嫁入りには一組を、と岐阜市のさる婦人会では提唱しているそうだ。いや本当の話だそうです。

マメ兵長

春画といえは、戦争当時これを持っている兵隊が多かつた。写真より絵の方が値うちがあるというので、いゝ絵は複写して配つた。その複写のうまい兵隊が一人いて、将校たちに頼まれてせつせとサービスしてやつたので、やがて兵長に進級した。おかげで仲間から「マメ兵長」という有難いニックネームを頂戴したが、老河口作

(七面山)

景色は美しいが二人にとって景色などはどうでもよいのである。パラソルを放り出して抱擁する若き奔放さがうすくような恋を描出して余すところがない。

〔三八四〕

商売があほらしなつて来る

人出

(文 秋)

ボカ／＼暖かくなつて来ると、どこからとなくゾロ／＼と人が出て来る。ジツと店番をして僅かな商いをしているのが、あほらしくなつて来た商人心理を巧くキャッチした句である。

〔三八五〕

箸を割る手つきに老いは争えず

(茶 仏)

軽いスケッチの句であるが、一沫の淋びしさが漂っている。自分ではそれほど老いこんだとは思っていられないのであるが、ハタから見ると、箸を割る手つきさえ、いかにもたゞ／＼しく、矢張り年の加減だなアと感じたと云うのである。

〔三八六〕

泥沼へ斬られて転ぶ役がつき

(丁 路)

スターだけで映画が出来上る訳ではないが、その他大勢

にしても、いい役もあればわるい役もある。この句はロケーションで、泥沼に斬られて転ぶだけの役がついたのであるが、それでも映画俳優としての誇りを持っていることは想像に難くない。

〔三八七〕

フアツションショウ銀座を歩く気で歩き

(東岸子)

これから売出そうという流行衣装を纏うて、いかにも得意そうにステージを前方に歩いたり後方にしりぞいたりするフアツションショウのモデルくらい嫌味なものはないが、それを銀座を歩く気で歩いてると見立てたのである。それは作家の主観に外ならないが、或はそうかも知れないと同感の出来るところにこの句の面白さがある。

〔三八八〕

眼が覺めりや丁度映画は渾んだ処

(花 村)

一パイ気嫌で映画をのぞく。キッスシーンを見ても大して興味が湧かない。まして連れて行つてと云われて来た女の手を握るほどに若くもない。そこでついウト／＼とする。ハッと眼が覺めたら、終ると云う字幕が映っていたと云うのである。

戦でその兵長が一番最初に戦死した。過ぎたるは及ばざるごとし、とわれわれは話合ったものである。

燃える話

東宝映画「おしどりの間」というのを観ていると、連れ込み宿のたゞきの上で、二人の若い男女がこんな会話をすると出てきた。

「さあ、部屋へ行こうよ」

という男へ、連れの女

「わたし、貴男に会うとどうしてこう燃えるのかしら……」

と上気した顔でしがみつくと、困った映画だ、と私は苦笑したことだったが、その翌日、文壇へ朝刊をとりに行くとハバリと赤い紙が土間へ落ちた。何気なくそのはさみ込みピラに眼をおくと、文面にいわく

「馴れないカマドに生木をくべてーいやこれはいけません。わたしはあなたへこども燃えます。薪炭の御用命はぜひ弊店へ」

末摘花御難

一帯止の落ちた音から解きはじめるという句がある。むかし奉天で宇和川木耳さんが、非常にこの句を賞めていられたのを思い出すが、その木耳さんの名もムビ大井正夫さん

「ゆうべの妓すました顔で街をいく
というのが好きな様であつた。

今はないが、その道のホンで売った「夫婦生活」というのに末摘花流の川柳を募集していたので、賞金五千元につられ、一ぱい飲んで立どころに二十句ばかり作つて送つたら、全没の代りに「新釈末摘花」で今発売」とか「家庭和合はこんな川柳で」とかいった困った案内がヒンビンに社に舞込むのには弱つた。妙なところでおいろけは禁物という話。

大三元

ある座談会の席上、理容組合理事長と肩書のある、さる散髪屋のオッサンが、鹿爪らしい顔でこんなことを言い出した。

商売柄、私は衛生、生理の面で研究をしたことなんですがね、あるべきところに毛のない女は絶対その家のタメになりません。数多くの事例を基礎にした結果でもありますが、殊に水商売をしている家にはイケません。悪性の見てわけです。

麻生 葎乃 著・米田三男之介装幀

葎乃 福壽草

定価二百五十円
送費 三十円
菊半型・函入

本書は川柳の母・麻生葎乃女史の異色ある作品の金宇塔です。各方面から御好評をいただけて居ります。

大阪市住吉区万代西五の二五

発行所 川柳雑誌社

郵便口座大阪七五〇五〇番 電話住吉一六〇八一

川柳家の二十四時

諸大家の真夜中の夢から、晩酌の饒舌の数の食卓の皿の中まで覗かせて頂いた。諸先生の生肉断片史として後世これが貴重な文献となるかも知れない。
—編集局

(11)

神戸市 延原 句 沙 弥

★一時——大ていグッスリ眠っているが、たまには何か書いたり読んだりしていることもある。

★二時——持病の加減でよく湯茶を飲むので、夏冬を問わずこの時分に上廁する事が多い。小。

★三時——夢のうち。

★四時——同じく。

★五時——時には二度目の上廁をすることもあがるが、そうでなければまだ夢の中。

★六時——目はさめているが、寝床の中でグズグズしている。

★七時——ないし七時半に起床、上廁約半時間。これは大の方。

★八時——ぼつぼつ朝食にとりかかるが、朝食といっても飯はたべず、スープか味噌汁一椀。牛乳一合、バター、チーズ少々、もつばら流動物。

★九時——出社、火曜、金曜日は

十時まで会議、他の曜日は執務

★十時——十三時 牛乳一合、十

★十五時——十七時 仕事。外へ

★十八時——まだ社にいる時もある。

★十九時——少酌。文字通り少酌

★二十時——疲れて眠くなる。書

★二十一時——その続き。

★二十二時——から

★二十三時——二十四時 の間に

★二十四時——

★二十五時——

★二十六時——



くらしいの軟かいのを軽く二椀、

おかずは割合多いが家族と同じ

★二十時——疲れて眠くなる。書

★二十一時——その続き。

★二十二時——から

★二十三時——二十四時 の間に

★二十四時——

★二十五時——

★二十六時——

★二十七時——

★二十八時——

★二十九時——

★三十時——

★三十一時——

★三十二時——

★三十三時——

★三十四時——

★三十五時——

大阪市 中島 生々庵

★一時——勿論熟睡中です。酒を

★二時——夜中はおろか、

★三時——起床するまで、

★四時——便所に立たぬのが、

★五時——未だ我れ老いずの証憑

★六時——四、五月から、九、十

★七時——約一時間。帰って余裕

★八時——冬なら八時と離床の時間は

★九時——

★十時——

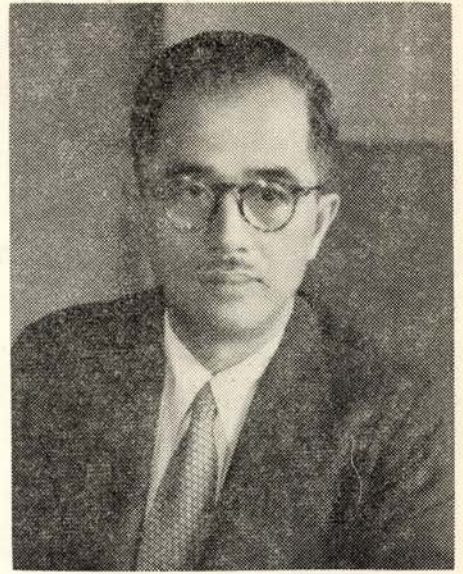


本 格 の 品 質

アサヒビール



とはいもいうことなし。パタ
バタと作ったり、ちよっとも作
らなかつたり、大へんムラがあ
る。以上。



★十八時——この往診の車の中が

★十九時——川柳の勉強です。平均三時間。川柳が出来ない日は

★二十時——小唄を唄ってます。月に四、五日は小唄と南無と花柳流の体操も稽古します。

★二十一時——浜寺に二十一時頃帰宅。入浴して、

★二十二時——晩酌二本。

★二十三時——陶然となつて、夕刊が読めたり、

★二十四時——読めなんだり。目が醒めたら明日の陽が昇っています。

時にはリンゴすって食べる。

★十六時——おふろ、便所、一切私の仕事にしています。

★十七時——川柳会、雑俳、等毎六会あり、出る。

★十八時——夕刊五種。

★十九時——なんだか無暗と時間を空費。

★二十時——ラジオ三、テレビ一。家人すきずきへ坐る。私は落語

★二十一時——夜は、夜更かししません。

★二十二時——それで無くとも夜の商売はつかれます。

★二十三時——夜、寝て。

★二十四時——早朝仕業をするようにしています。

二十四時裏ばなし

正直のところ、これほどまでに、柳界の話題になろうとは夢にも思っていなかった。路郎先生も最初は五十人くらいと考えておられたようだった。

「百人集までにもってゆきたいね」と、大いにハリきっておられる。

柳壇全日本を縦横に、大家の夢を訪ねるベンの使者は、きよう西へ飛ぶか、あす東へ走るか。柳界の黎明を指す大家の夢のハリはますます快調に号を追う。(F)

次号執筆者

東京都・石原青竜刀氏
北海道・亀井花竜子氏
石川県・榎井六葉氏

東京都 西島丸

★八時——夏なら七時半、冬なら八時半に車が来る。

★九時——大阪の診療所まで三十分。車の中で朝刊を読みます。

★十時——診療場に入ったら

★十一時——生々庵でない

★十二時——別の

★十三時——人間になつて終うのです。

★十四時——休息を兼ねて昼食をとるのが十四時前後。大抵はライスカレーで二十分間。この二十分間は貴重でして、急ぐ用向き(診察以外の)やら、家庭の用やら、お客さまに食堂へ来て頂きます。

★十五時——残りの患者を、

★十六時——四時頃までには終り

一服する暇があったりなかったり、

★十七時——往診に出かけます。

★一時——白河辺に居ります。

★二時——航行中で

★三時——少し動揺中

★四時——二回目の小用行

★五時——おきて商売にかかります。

★六時——新聞みて、原稿かいたり、入浴外して、みがき砂で。

★七時——朝食は米です。孫らはパン。

★八時——毎日、墓の草とり、約三十坪、間に合いません。

★九時——掃除で夢中

★十時——大抵ボク／＼あり、相談事多し。

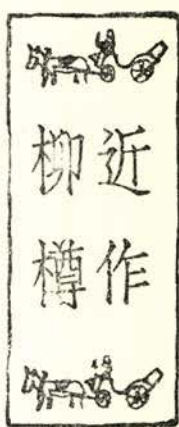
★十一時——町の仕事をします。

★十二時——家では盆とりません

★十三時——盛んに人出入あり、

★十四時——二時間は動き通し、





麻生路郎 選
北川春巢 選

粕汁をのむ時伸びたヒゲが見え 西宮市
ほんぞうの酒造の最盛期

本揃い見たい会いたいより眠し

達者だと出したあと直ぐカゼをひ

酔うて出たきげん運勢見られたり

なめくじに似た冷やぐへ塩を撒き

おしやべりの世話女房となるタマ

ちゝ嚙むと泣くよに云うて離乳

親馬鹿の気持も知らず舞いおさめ 兵庫縣

ボキ／＼と三脚たゝみ春惜む

さくら餅早くも菓子屋の店に春

久々に釣糸たれて肩が凝り

芸無しの専務お供を連れて行き

ぼつりぼつり／＼言葉にならず

万点の姿姑の肩をたゝく妻 金敷市

稚氣愛すべき御大のかくし芸

コネのない不満同志で呑み屋の灯

水ぬるむます女子寮に春がくる

委員長やめれば哀しや平社員

女事務ミセスになつても茶をく ば

出口白猫児

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

文平

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

背広きてドライ坊主が呑み屋へ来

商談○ニコヒが酒に入れ替り 大坂市

ガス自殺俺より生活のいい人が

子を負うた男に家裁たすねられ

お茶入れてそれから代筆たのま

人権費切り詰めそして置く二号

邪心なく朝湯で伸びをしてみたら

ボinasの残りて一年の計をたて 松江市

恋をしている正月をじつとせす

いゝ喉をだせば遊んだ過去にされ

天国で結びそこなつて結婚し

鼻唄は逢つてやる気のコンパクト

尋卒が貯め大学が田地売り 大坂市

ネオン点滅色即是空と云う様に

アナクロだ何だと女教師の袴

隠し芸又あれかいなと云う拍手

鋭さは知性にも似て冬の月

三面鏡ほんとの私はどこえいた 大和葛田市

税務署であなたと云うて頂いた

硝子ふく指さへ春は美しい

十年の歳月芋の値が下り

ニコヨンの冬は日向で順を待ち

オルゴールやきもきす云う響き 岡山市

神棚へまだよせ書の旗をつり

賢夫人と並びエチケットに疲れ

病人の指図で仏間の花を替え

ふんいきでもう酔うている花の下

職安のストーブブリキ罐で燃え

コップ酒オーバーの襟は立てたよ 高砂市

春雨ヘレインコートの襟を立て

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

米虫一乃字

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同



自衛 (二)

「神武以来」「紀元節の復活運動」「自衛隊死の行進」に黙しかねて――

戸田古方

血のめぐりが悪いのか、てんからてんがわるいのか、こと議論となるとつい云いまかされてしまつて、腹がたつと暴論になつてしまい、はては腕力にものをいわせかねない。

それでいて議論すきでだまつてよいいな。さて実行の段になるとへなへなとくずれてしまつて、たまに賛成してくれる人もあつてにとられる仕末である。これを無責任というのであらうか。一事が万事私の思いつきにすぎないのかもしれない。こんな人間の考えを説む人こそいゝめいわくといわざるを得ない。

憲法第九条をさし金したのは誰かしらないが、自分達も主権者の一人として日本人は馬鹿にありがたがつたものだが、それが、うじや、うじやといううちに警察予備隊が出来、保安隊となり、いつのまにか自衛隊というものに成長してしまつた。

戦力がどうのこうのといつては

[illegible]

仲どんたく
同
徳永 鬼美
同
青柳扇子仙
同
岡崎 一也
同
岩原 滔川
同
石川 ひさみ
堀 須賀太
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同
同

傍島 静馬

米ソ間の冷たい戦争がなかったら、憲法第九条は今日ほど有名にならなかったかもしれない。敗けた日本が勝ったアメリカに酷いあつかいをうけなかったのは冷たい戦争のおかげであるが、アメリカもたゞ日本に色よくしたのではない。極東という裏門につないだ犬だけのねうちをみとめたからであ

桃谷順天館

植山　武助
同村井　城南
同平田　実男
同伊原　明林
同赤松　玉雪
同豊島餓次郎
同三上　春雄
同中西兼治郎
同禹石　鼓風
同室井八九寸
同奥谷　弘朗
同日井三林坊
同高野むじな
同大杉　春吉
同加川　靖真

光は東よりともいふ、西の文明は行きつまりつゝあるともいわれ

紳士服

松崎洋服店

前停電 橋屋淀

TEL (99) 3417-9



家庭ではそんな素振りもないドライ
街へ行く服で炭焼バツト買い 岡山県
炭を焼く手とも思えずギターひく
花よそに重き生活のトロを押し 香川県
娘が嫁つて愛称だけが村に住み
娘が病んでミシン飾りのよう置かれ 玉野市
父ちゃんが来て奴隷糸が伸び
うす暗いから屋台そばまく喰え 府中市
煙草の輪作って夢みる独身寮
霜焼に手袋はかす死出の旅 大阪市
人形と一緒の旅も淋しかる
移住三年お勝手からの客も増え 西宮市
拍手の音に負けない願い事
アリランを歌うた頃は強い国 石川県
寺詣り嫌いなだけの欲があり
花嫁さんより衣裳の方をほめ 岡山県
岩田帯漬物石が重たすぎ
十燭は他人の春を編んで居る 新居浜市
スコップの児も交つてホッピン
療友の智慧でやんわり撃退し 貝塚市
臥てる間に着物はみんな派手に
丹前で飲めば相手はほしくなり 岡山県
お古もう素直に着ない歳になり
病室も菌を追出す豆を撒き 山口県
慰めの便りは花も封じて来
つまみ喰いした見えぬ顔で来る 宇都市
子育ての神武景気へボロ脱げす
美しいお客に母がまずあわて 京都市
パンだけで済むお屋なり母と児と
表情の持合せなく「いらっしやい」 尼崎市
パーラーのあかりのなかの恋の

同 松永喜久枝
同 香川 雅人
同 星川 陽石
同 小林てるじ
同 永田都詩子
同 野呂 湖島
同 高瀬 幸路
同 光好 陽子
同 加藤 向水
同 護川 梢月
同 小田 紫草
同 原田 綾女
同 神田 豊年
同 藤川沙智子
同 中山 桔梗

雲だけが動く浮世の外に住み 大阪府
メーデーの無事見物にものたらず
猫一匹飼うて生活扶助がもめ 岡山県
一本気将棋棒銀より知らず
青春に悔ありトレモロかき鳴らし 鳥取県
流感へ医者大きな風邪マスク
セーラーを嫌い学力落ちはじめ 大阪市
シヨック死の記事漢方に切りぬかれ 宇都市
出直して来ますとそれから寄る 兵庫県
安静の宣告痛い春日和
タバコ止めてみれば貧乏ゆすり 兵庫県
つまづいて見れば冷たい風が吹き
月一万位の交際費が出せず 滋賀県
二万円の自転車春の陽に光り
父ちゃん口先だけで家を建て 大阪市
素うどんは素うどんなりの人生観
結納を聞いてお嫁を又見に出 天理市
破産して人の情を知ったとて
春斗の前ふれとなるカンパ来る 鳥取市
求人欄なるほど現職ありがたし
まだ寝とる父に天気を聞いて出る 岡山県
骨なしの様に下っ端よく動き
腹這いに寝て考えるペンを持ち 大阪府
よき娘の年令を気にも世話が好き
そばかすがそばかすに見ゆ下り坂 石川県
はるかえた障子のまでお茶を入れ
誘われたほうが入場券を買い 名古屋
リベートのつもり麻雀負け続け 善通寺市
はんちんぐ又その上を頬かむり
赤線区帽子とられる歳でなし
豊作を我事にして小商人 福岡市

同 藤本 千永
同 林 葵丘
同 田中蛙眠子
同 本多 省三
同 鎮波 錦花
同 遠山 一雨
同 土守トン坊
同 和田 饒
同 岡田花奈女
同 小林孤呂二
同 二宗 吟平
同 井上美恵子
同 齊藤 巖
同 野田 一念
同 橋 十四呂
同 岩田十三楼

ている。

無抵抗、不服従運動のガンジー
兵は人間の滓であるといった中国人
兵、その東洋に釈尊が出た。この
流れの末に法然も親鸞もその全生
命を托して永遠にかまやいていろ
のである。

青ペン 赤ペン

一三 夫

「番傘」二月号に、
▼投句用紙にペンでお願いした
い。鉛筆がきは選者に対して御
めいわくのことと思う。それから
達筆の草書、自己流のくずし字は
いづれも能率上困るので、楷書で
お願い致したく、原稿はそのまま
印刷所へまわりますので、印刷所
の文撰（活字拾い）は大抵戦後の
新しい教育をうけた人たちが多い
ので、そういうことも御考慮にお
入れ下さい。わけても姓雅号は必
らず楷書のこと。

「ふあうすと」三月号に、
▼編集で困ることは、原稿紙を無
視して字数不明の書き方、ひねく
った漢字を多く使う、句読点なし
でベタ詰に書く、こんなのが鬼門
です。

「川柳雑誌」四月号に、
▼サテ、ぼくの番だが、悩みはい
ずこも同じという感を深くしたわ
け。便箋へ手紙を書くようにギッ
シリ詰めた原稿を、一字ずつ数え



酒のんで遊んだ話し 小商人 鳥取市
 炭の無い暮しの中でパパにママ 鳥取市
 口惜しさは片親と言う断りよう 出雲市
 風邪引いた声にも恋は気が塞ぎ 出雲市
 看護婦に喰わせてもろて気が疲れ 岡山県
 麦飯を喰べとれば胃袋調子よし 岡山県
 学生アルバイトとすひげ面が入つて来 西宮市
 叱られているのに舌が出てしまひ 西宮市
 挨拶へ三寒四温のいそがしき 西宮市
 家族バス安い孝行もう出来ず 山口県
 春雨へ交通巡査も濡れて立ち 広島県
 神武以来の宣伝財布をゆるめさせ 兵庫県
 イヤリングはずし田舎の母に会い 大坂市
 裏町も神武景氣にぶらさがり 大坂市
 孤独とはつまらぬ意地をはる男 大坂市
 御主人のサラリーほどの美しさ 鳥取県
 白髪ぞめまでして老母の寺詣り 大洲市
 若い氣で徹夜をすれば三日も寝 大洲市
 拜み屋へ委せたきりで死んじまい 兵庫県
 親子してせまい世間へ嫁を選び 大坂市
 握手だけでも寄せつけぬ未亡人 空岡市
 口すぐ水が冷い春近し 松江市
 夢あつた乙女日課におしめ干し 空岡市
 ホームまで野良着で送る農繁期 岡山県
 灯をさげて春のおどりの譜に疲れ 大坂市
 貸本は漫画ばかりを仕入とき 空岡市
 庶民へも 天の恵の春の風 空岡市
 値ぎるだけ値切つて金はすぐ呉 空岡市
 アリバイの証人飲み屋でたより 七尾市
 馬に乗る花嫁もある田舎道 大坂市

同 同
 岩田八文銭 同
 加藤 虹路 同
 福田 祥男
 正本九里三
 本城 弦月
 瀬崎 紫路
 安平次弘道
 山田スミ子
 大安 一風
 寺仙 花車
 竹内 千里
 六車 静々
 鈴木村諷子
 横田 放人
 尾花 群雀
 久米あさ女
 正口 辰始
 安藤 笑子
 本田 稔
 佐内 隆文
 杉本たつよ
 滝井 貴洲
 稲葉 只平
 谷本 一春
 木山 二路
 松高 秀三
 堤 勝三

嗜好費が趣味費になりて肥えはじ 愛媛県
 蘭草賞められ滞納一寸こそばゆく 空岡市
 半分はどこかで聞いた処生訓 大洲市
 若かりし頃の彼女に子が八人 河内長野市
 ハンガリーのような 部屋掃除 伊丹市
 泥濘の歩行がどじようすくいめき 高槻市
 詩集読む少女氣になる咳をする 大坂市
 さくら餅そこに来てゐる暖かさ 今治市
 口答える程玉子酒が効き 糸子市
 洗濯機もう隣りまで押し寄せる 宇治市
 寄留までしてきてみれば二部授業 大坂市
 食うて寝るばかりに閑はなし 貝塚市
 追越したとたん声援立ち上り 石川縣
 いしばしを叩いては金ためてゐる 松江市
 バス楽しミス〇〇と同乗し 石川縣
 オフィスの自由時計に左右され 西宮市
 差押え来ぬ間荷物を疎開させ 宮崎市
 来ぬはずの波にあわてる海水浴 ハワイ
 恩典の帰化で選挙し選挙され ハワイ
 棺に寝てどうやら人間らしい顔 ハワイ
 微笑ましわたしの奥二世 二世 ハワイ
 物忘れすれば齢よと遠慮なし ホノルル
 降る程に縁談があつたなど嘘のよな 東京都
 いゝ嫁だ黙々として麦を踏み 広島県
 玩具とも云えぬ値段にチト思案 愛媛県
 伝言板にが虫かんだように書き 西宮市
 人生に疲れ今宵も飲み疲れ 愛媛県
 金持の庭とは知らず雀のふん 石川縣
 停年え銀行よりの祝い状 兵庫県
 風呂敷一つたよりに娘汽車の隅 長野県

河本南牛子
 高木 洪柿
 富永 建朗
 森本黒天子
 小川静観堂
 高木土佐太郎
 豊島 恒子
 越智 義夫
 景山 蘇生
 柿本 古竹
 河井 庸佑
 小田 柳叟
 林 古意知
 岡崎 祥月
 岡馬 新一
 村上 球絵
 野口卯之助
 藤田 銀水
 宮政 周防
 友保 斧平
 満生 拜山
 羽佐間柳葉
 菊地 紀久
 伊関 指月
 凡子
 松島 光一
 阿部凡太郎
 山上千太郎
 前川 越山
 小出 督生

て、十五字詰何行に割付けている
 ムダな時間を想像願いたい。
 映画雑誌を編集していた頃、二
 誌から三誌の月刊(菊版七、八十
 頁)を一人でやつたこともあつた
 が、本誌を編集するほど時間をく
 わなかつた。文芸誌は難かしい。
 三月号の誤植はヒドかつた。責
 任校了(印刷所へ責任をもたせて
 校了にすること)で差し替えをし
 てくれなかつたからだ。たとえば
 内藤きさ子選(三〇頁)の(き)
 を初校も再校も(を)になつてい
 たのをそのまま刷つてしまつてい
 る。四月号は時間の許せる限り三
 校でも四校でもボクの得心のゆく
 まで赤ペンにぎるつもりだ。

愛猫プ!ちゃん紹介

丑松クン二代目がきた。黒いの
 でブラツクと命名されたが、プ
 ちゃんの愛称でよばれることにな
 った。

ボクの家にはいた猫は「雑布」と
 いう名をつけた。三毛だったが、
 破れた雑布のような「柄」だった。
 名は体をあらわしていた。

サテ、プーちゃんだが、見かけ
 はなかなかおとなしそうではある
 が、案外コイツ猫を冠つてゐるの
 かも知れない。

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五十枚綴)三〇円

送料(二冊分)八円



久留美君の事ども

麻生路郎

久留美君が亡くなった。もう少し生きていたようなことを筆にしていたが、心臓マヒではスイッチが切れたと同じで、まことにあつけない終焉である。私たちももう少し生きていて欲しかった。

久留美君とは随分ながい交友であつた。四十幾年になるか、ハッキリ覚えぬ。古い雑誌でもひっくり返せば判ると思うが忙しい私にはそれが出来ない。

久留美君は明治二十五年一月月に金沢に生れた。姓は安川、名は実、以前は久留美と云つたが、後に「流」を「留」に変えた。別号に筆載や蛙村を用いていた。著書には句集「かき松葉」がある。質屋をや、古物商をやつた。後に新聞記者に転じ、新聞記者は相当長くやつていた。

私をはじめ彼に会つたのは神戸の花隈の宿屋だつたと覚えてゐる。どんな話をしたのか一つも記憶がない。君の記憶力のよかつたことは柳人中でも、おそらく君の右に居る人はいないのではないかと思う。誰の句でもよく覚えてゐるので、あきれるくらいだ。近ごろ、

久留美君の記憶力に少し狂いが生じたように感じていたが、死期が近づいたことを、それとなくあらわしていたのかも知れない。

私は金沢へは三回か四回出かけた。行くと、いつもよろこんでつききりについていて呉れた。そして、あちこち引っぱり廻わしてくれた。君とは議論などは一切しなかつた。金沢へ行つても大阪へ来てもよく飲んだものだ。いつも私には一歩譲つていたので弟分のつきあいだつた。私の玉出時代のことであるが、夜の二時ごろ金沢から電話をかけて来た。声の調子から一パイ機嫌であることがすぐ判つた。風邪をひいて寝ているのを起され、電話口に長い間立たされ風邪をひきそえたことがあるがそれでも腹が立たなかつた。君はよく酒の上で失敗したので、度々禁酒をしたが、その禁酒は決して長続きしなかつた。「川柳雑誌」へ禁酒広告を出して呉れと度々、原稿を送つて来たが、その広告だけは決して掲載しなかつた。おそらく、雑誌が出るころには禁酒を破つてゐるのデイヤな思ひをさせ

ないためだつた。飲み代がつきると、私に短冊を十枚送つて呉れと云つて来た。そのころ、私の短冊を一枚五十銭が一円かに売りつけて、それで飲んでいるとのことだつた。長い間新聞記者をしていた関係で私の短冊を知名人へ持ち込んで飲みしるにしていたのである。

私が今、選を担当している北国柳壇は窪田銀波楼氏（今は故人）が北国新聞の主幹をしている頃に開設して、自ら選者をしていたのであるが、久留美君はこの北国柳壇の出身で銀波楼氏に師事していた。その後私が金沢を訪れた際、二人で飲んで銀波楼氏を訪ねた。奥さんに三味線を弾いてもらつて、私が長唄の駒進帳を唄つたことを記憶している。そしてその夜は銀波楼氏の宅へ泊めてもらつた。久留美君と小松へも出かけたし、思い出は尽きない。川のふちの貸席へつれて行つて、変な名前を魚を自慢たらん、喰べさされたこともある。

最後に、金沢を訪れたのは西本三笑君が、マル安とか云う料亭を

柳界

展望

句会

▼本社四月句会、四月七日午後一時から天王寺区下寺町二、市バス停前光明寺で開催される。（別稿参照）

告参照）▼南区医師会文化部杏林川柳会（大阪市）は三月十九日午後七時から一哲居で開催▼南海電鉄川柳会（大阪市）は三月廿五日午後六時半から粉浜親和寮で開催▼本社後援大万川柳会（大阪市）主催、大万川柳六周年記念川柳大会は三月十七日午後一時から大阪市阿倍野区松崎町三ノ一〇、大万で開催され盛会だつた。▼川維明和病院支部（西宮市）結成記念川柳大会が三月二十四日午後三時から阪神電鉄鳴尾駅下車北の明和病院二階講堂で開催された。以上路郎主催出席。▼川維淀川支部句会（大阪市）は四月四日午後六時から東淀川郵便局で開催、兼題「愚友」「スカタン」「苦笑」「悪市交通局川柳会は、四月十七日午後五時半から交通局病院五階サニールームで開催、兼題「気休め」「後悔」「サービス」▼333川柳会（堺市）句会は四月六日午後六時から堺市島野工業KK会議室で開催。兼題「鏡」「縁」▼富柳会（富田林市）は四月六日午後一時から富田林市役所日本間で開催兼題「親切」「ボロロ」▼川維支那連合親睦川柳大会は、四月十四日午後一時から岡山で開催、兼題「腕」久米雄選「誘い」七面山選「電話」方大選「おぼろ」麦太楼選「コーヒー」葵丘選▼川柳下関支部三月例会は十七日午後六時から下関駅会議室で開催▼川維米子支部句会は三月十日節枝居で開催▼村田周魚氏句碑建立記念句会（東京都）が四月七日正午から上野公園東照宮社務所で開催。兼題「盃」三太郎選「拳ける」雀郎選「天下」〇丸選「廻る」速亭選、三月末日〇切、投句料百円、東京都千代田区神田東結屋町二七川柳きやり吟社句会部▼川維岡山支部句会は二月二十三日午後六時から日赤岡山支部で開催▼川維松江支部句会は、二月二十一日午後六時から山川児居で開催▼川維備前支部句会は、二月十六日午後六時から久米雄居で開催▼川維倉敷支部句会は三月九日午後六時から慈愛幼稚園で開催▼川維小松支部（石川県）結成句会は三月一日午後六時から茶仏居で開催▼ひろしま川柳会おの、川柳会合同親睦川柳会は広島市外チヤス牧場で開催▼石川県各川柳社主催安川久留美氏追悼句会は三月三日午後五時半から金沢市西町、大谷廟所で開催▼第四回鯉はこグループ（名古屋）は、二月二十四日午後一時から野田二急居で開催▼富柳会川柳会は、三月九日午後一時から富田林市役所日本間で開催▼岸和田川柳会は三月十一日午後六時から蛸地蔵駅前、丸二食堂で開催▼中日川柳会五周年記念誌上大会が名古屋市中、中日日本新聞社文化事業部主催の下に三月末日〇切五月十二日発表で催される。選者は孝三郎、寿々奈、半面子、竹林、八重

やっている頃だったが、その頃久留美君は禁酒をしていた愛用の盃を君に贈ると云って九谷の盃を買った。一寸いびつだったのがなか／＼の逸品だった。これがいびつでなかったら大したものだと云っていた。今は君の片身として私の手許に残っている。

その(○)安に泊って、放送をやったり、句会へ出たりしていた私を引っぱり出して、いもを食いに連れて行った。私はいもは喰べない方だが、その家は一寸風変わりだったので今も記憶に残っている。久留美君はいも屋の座敷へ上り込んで、料理屋へでも来たような調子でいもを喰べていた。

今年北陸の旅をしたと思うているが金沢へ行っても君がいなのはより淋しい。

安川久留美先生 急逝のこと

伊藤 茶 佛

二月二十日午後三時金沢市長町の安川久留美先生が急性心臓マヒで急逝されました。享年六十四才。二月二十二日葬儀を自宅で営まれました。

金沢の各川柳吟社をはじめ石川県下の各川柳会の合同追憶句会を三月三日午後六時から金沢市西町の大谷廟所に於て開催、遠く福井富山の柳人も駆け参り約六十名で故人を偲ぶ一夜を送りました。

故久留美先生は不朽洞会の洞友として路郎先生とも親交があり、

本年は先生を迎えて北国柳壇の大句会を金沢から小松で催し安川久留美先生にも喜んで戴けることを期待していた矢先でもあり、急逝が惜しまれてなりません。

私からも早速御通知申上げる筈でしたが、金沢の方で万事通知済とのことで、私も二十二日の新聞で急逝を知った位で失礼致しました。「こまつ」の四月号を安川久留美先生の追憶号に特輯したいと思っています。

久留美君を憶う

船木 夢 考

久留美と(当時久流美)二回目に出会ったのは「六華」の創刊号を銀波楼が出したその翌年だから明治四十三年の三月であった。金沢の殿町の宿、山中屋へ久留美が私を訪ねて来て浅野川のは、のり、待合、水月楼へ無理やりに私を引張って来て芸妓三人を揚げての待遇振りにには実に驚かされたものであった。その翌日もずつとその水月に流連だから酒の弱い私にとって

は実のところ有難迷惑であった。その翌日の晩は水月楼の前の牡蠣舟で私の歓迎句会を催してくれ。何でも十名ばかり集ったように記憶するが、その顔ぶれは光琳坊、うみ三、漁村などで其の人々は覚えなないが皆んな同じような年頃

頃の若い人達であり、春雪の降りしける寒空をものともせずシャツ一枚で踊り唄ったものであった。その時の席題「夢」の選で作った私の柳吟を本人の私が忘れていたのに昨年、久留美君を訪ねたときその句を久留美が覚えていた、その記憶力の旺盛なのに驚いた。

○

久留美は、明治二十四年十二月生まれであるが戸籍面では二十五年一月一日となっているといううなことを話していたことがあった。彼は正五、六年ごろ西町筋の内に居住していた当時は全盛であり、各地からの有名川柳人を迎えて華美な歓迎をしたものであったが彦三へ移って道具屋を始めた頃には家財の殆どを川柳と酒のために費い果したとも云い得られる。

その後、新聞記者として舞鶴へ単身転居して以来、彼は不幸の連続であった。金沢の或る料亭の二階から落ちて左足の怪我、脳を患ったの病院生活二年、それに長男の逝去と実に不運つづきであった。それでも愚痴一つこぼさず、いつ訪ねても川柳に親しんでいたのであった。私が訪ねるといつも「待っていた待っていた、よく来てくれた」と云いながら例の松葉杖を突いて近くの酒屋へ出かけて行くその嬉しげな後ろ姿を眺めて私は、ひとしれずぼろりと涙を流したものであった。(二、二一日より)

昭和三十三年二月二十日歿
享年満六十五歳二ヶ月

夫、民郎、吾風、夢考、雅亮の諸氏。

消 息

▼市場没食子氏(大阪市)は、二月廿八日から三月三日まで天の橋立、城崎方面に公務で出張、折からの珍らしい雪に「城崎の雪一泊を惜しむなり」の旅信を寄せられた。▼水谷竹莊氏(大阪市)は、二月廿九日から山中温泉金沢市を経て、和倉温泉を廻り、妙高の風光に接し長湯湯田中温泉から三月三日帰阪、旅先から「トンネルを出るたび変わる雪景色」の句信を寄せられた。▼速水真珠洞氏(福岡市)は郷土文化総合雑誌「芸林」三月号に「春色歌舞伎放談」を執筆された。▼丸尾潮花氏は川維婦人友の会々員内藤さき子、沢田美喜両氏に伴い二月十七日府立羽曳野病院に藤本千永さんを見舞い、どんぐり川柳会の会員とも柳談された。▼英田久米雄氏(岡山県)は岡山鉄道病院入院中の氏は三月十三日退院された。▼高峰柳児氏(須坂市)は今回臥室川柳会を設立された由をお説き時事川柳の長野版の選を四月一日から担当される事となった。▼永田六電子氏(大阪市)は左膝関節血管腫のため北野病院に入院加療中の由一日も早く全性を祈る。▼阿達美雄氏は俳誌「草々」三月号に「発音上から来た変態漢人名(一)」を執筆された。▼津田千舟氏(大阪市)は三月五日から岸和田市魚屋町五八番地、日用品雑貨の店舗開設された。▼永藤弥平氏は今回豊中市曾根三番地日本住宅公団曾根団地十号三〇四に住所変更された。

慶 弔

▼永田竹碧氏(熊本市)永田六電子氏実兄は、二月二十五日長逝された。謹悼▼池沢白翁氏(川柳不朽洞会賛助)は一月六日堺市田出

井町四丁五九番地で死去された。享年七十四才、謹悼▼中村九呂平氏(下関市)の母堂が二月十九日長逝された、謹悼

柳書・句集

▼「古今田舎柳初編」が今回松本市大町町のしなの川柳社から復刻された。半紙半載二ツ折和綴活字本、価二〇〇円(二共)一田舎柳は地方古柳書の珍本で地元石曾根民郎氏が多年の研究調査による解説が附されている。古川柳研究家を一読をおすすめする。▼句集「破竹」第一集が二月一日に徳島県板野郡上板町神宅、破竹川柳会から発行された。価五〇〇円。▼自選句集「せんりう」昭和三十一年版が山形県東村山郡天童町駅前けし川柳社から発行、続いて三十二年版が企画されている。詳細は同社へ。(摩)

正 誤

▼三月号一六頁下段一三行目の「御苦勞な」の句は暗合句のために取消すこととした。▼二〇頁上段七行目の「やまい背直」は「やまい背直」に訂正。

ウルトラニツサン 万年筆専用

専 売 特 許

ニツサンインキ工業株式会社

大阪市天王寺区勝山通四丁目二六

電話 天 王 寺 ㊤ 7977

私達から

後藤梅志



待望の句集「私達」を手にして、かくも多数の句を、各人各様の面白さで綴められた路郎師のご苦労に感謝した。各人各様の面白さは読み返すに随って興を増し、愛誦おく能わぬ名吟を多数発見した。二度目三度目と読むうちに膝をうつような句には鉛筆で印しをつけてゆく様になり、更にそれを、原稿紙に写しとった。更に欲が出て一人一句ずつ競詠体にしてみると、何れ劣らぬ花菫浦の観があり、何んとしても飽かぬものを感じた次第であるが、中には既に熟知の句はありもあるが詠者に对し、こよなく親近感を覚えるので、思きって一般読者と味いたく寄稿することにした。

(三二、二、二〇)

句集私達から (翁表順による)

女湯へツカ〜とへッ

プバーン 春雄

税務署ときいて蠅取紙を踏

み 玲人

温泉の効能笑い〜聞き

湧三

お年齢だと言われむかつとして帰り

没食子

まだ眠くないや折詰待つて

いる 茶仏

聊かはどれもはげてる一等

車 侃流洞

バカネーで女の抗議けりとな

なり 高志

パンパンの寝相鋭い陽がの

どき 芳仙

二階から冬を見ているふと

ころ手 夏六

妾の子また美しい生れつき

丹路

貯めて見ればまた言う事の

変る君 方正

修身を抜け出た婿だ親が惚

れ 形水

火吹竹何も忘れた顔で吹き

八歩

偽りの微笑を洩らすほどに

古い 迷窓

日本地図胡瓜の如く横たわ

り 喜由

酔どれの出るしゃっくりに

節かつき 銀句楽

警察の手帖俳句も書いてあ

り 牛耕

総入歯膳に置かれて寒うな

り 夜潮

師を訪えば焦土に変わり左記

移転 好郎

もう一人診ないと米の買え

ぬ医者 瑞川

通信簿意地がないにも程が

あり 日満

さようなら云えずアベック

まだあるき 晴峯

晩年の運も逃がして駅に寝

る 文秋

盲判一つで書類らしくなり

凡九郎

頓服を上げますと医者あわ

てない 春渠

近道はよそうに父の老を知

り 孤浪

靴磨きブラシで客を差し招

き 十悟

免職にならぬ程度でくだを

巻き 水堂

もう少し生きると背広出来

あがり 千容

北風に首だけ前へ前へ行く

幽王

金のない友達ばかりついて

くる 小松園

未亡人俸を頼りきる姿

いさむ

夕立ちへ遂に散髪刈ってゆ

南柳

斜陽族さすが式辞の堂に入

り 美秋

水引いたように法事の客が

去に 紫香

立ちどまるところが絵になる

安芸の国 半休

もどしくなれば朝鮮語で

話し 無鬼

妻何を祈るか時間倍かかり

人間 文月

人間の欲でたまった古道具

借りて来た出刃庖丁も切れ

ぬなり 雄々

叩き売からも甲斐性なしに

され 梅志

やゝこしい法規覚えた頃変

り ト占

女事務例外もなくみんな飲

み 白水

職場大会鰯を食った息で来

る 不水

高校になり抽斗に錠をかけ

水 清子

水族館あんな処にタコが居

る 良坊

南無阿彌陀仏在世四十一時

間 白柳子

涼み台握りたい手がよく動

き 博也

共産党ほどにきらいな蚊に

食われ 清潮

女学生乳房で春の風を押し

七面山

糞虫のよっぽど荒れるなど

湖山

川柳漫筆

八木摩太郎

人生は短く、芸術は長い、機会
は去りやすい、とユース・オブ・
ライフに書かれてある。人生五十
年功なきを恥ず、しかし、句の生
命は長い「いのちある句を作れ」
の玉条を思うや切！

★

路郎先生の「旅人」霞乃先生の
「福寿草」に続いて、川柳不朽洞
会員句集「私達」の三部作が生れ
た。ノック・ノックを持て柳界
にシイト・ノックをされる路郎先
生は、かつては、至文堂から「川
柳とは何か」を上梓された。正に
柳壇ブームである。このシイト・
ノックに依って、句の扱い方、句
のさばき方を見せられた気がす
る。つまり、個人句集！と云
われそう。神武以来と云われそう。

★

庭球に、右へ来るボールと、バ
ックで打つボールがある。野球も
オーバースローとサイドスローがあ
る。川柳の作句にも、後から課題
にぶつつかると、横から持つて
行く、句の作句方法がある。課題
吟締切す前に、一句生れて入選す
るスピーリ込みと、没句になって、
タッチ・アウトにされた時、その
心持は一抹同じ心持！ 歓喜と悲
哀である。

★

景気よくやれに會計ひやつ
とし 一善
煌々とすがぎょうさん売
れ残り 豆秋
相合傘きれいな虹を見てか
えり 圭三
県人会横事が酒をつぎまわ
り 方大
夕顔のたねとはっきり亡妻
の筆 一浪
宿の名も知らず団体ついで
ゆき 雄声
重役になり人間になり損こ
ね 香林
二世までも嫌と女の笑い合
い 若菜
出養生毒になるのを連れて
発ち 堰子
初勤め社長の湯呑だけおぼ
え 麦太様
空堀を酔うてるほうが忘れ
ない 鋭々
人間くさいとこにボン引ボ
スおかま 古方
社長室只ウンウンのいそが
しさ 普天
酔うて手を出せば女難の相
と言ふ 貴山
すっぱりと別れて若いのを
貰い 淡舟
ストかいなあた紋日があふ
いになり 文蝶
もの足りぬ夫事業の虫のよ
う 草一郎
女房はさからう様に薄着な
り 生々庵

双眼鏡の中とも知らぬふざ
けよう 井蛙
たくまない仕草で女医は児
をあやし 光郎
ここだけでないと給料遅配
され 東岸子
遭難の山も綺麗な秋景色 恒雄
皿割った音を奥さん寝間で
聞き 栗
愛称の電話東京からかゝり
奥様にされて市場を出て笑
い 梨里
混浴ヘタオール一本たよりに
し 一栄
おっさんと言われて守衛そ
れでよし 竹青
御免ねといつて仲よし先に
嫁き 花村
トンカツになる運命を良く
太り 回天子
抱き上げて賽銭箱の底を見
せ 初甫
田が消えた学資と知らず吞
み歩き 吞水
女手のとにかく種をまいて
おき 久米雄
アルバムのそこは嫁く娘が
剃いだ跡 清生
出前持呪いたくなることば
かり 緑雨
高過ぎる勘定書で鼻をかみ
十九平
三等車お互い様の足を出し
三司

聴診器あてる場所なき細り
よう 迷路
施しをしてお妾けは手を洗
い 夕鏡
端然と汽車で看護婦本を読
み 柳慶
香具師の蛇動かぬまゝに暮
れてゆき 妄夢
ワンマンのボタリ椿のよう
に散り 満年
二階借気のないアバ、して
上り 鉄児
おだやかな催促状に恐れ入
り 丁路
不幸にもダイヤが似合う掌
に生れ 一三夫
知恵の輪へバ、も本気で坐
りこみ 春日
恋人と合う電柱へ風が鳴り
灯竿
お見合で東京井をつかひ
い 恵二朗
舌を出す癖は娘のときのま
ゝ 水客
おとんばに頼って父の不仕
合せ 杜的
惚れ切つてお園のような気
にもなり 潮花
負けまいとする老嬢の声尖
り 貞女
いゝなあと水の流れを見て
るなり 一瓢
いざこざがあつて散歩に出
たまんま 梅里
子の齡をいちいち妻に聞い
て書き 北海

うらゝかきガイドの足へ鳩
が寄り 京二樓
欲の無い顔へ保険屋齒が立
たす 万古
隣りの娘まさか意見もして
やれず 美笑
いゝ月夜向うも二階あけて
いる 竹莊
ひのえうまですと助産婦笑
しい 谷水
俗名をとめて葉瓶しすか
不二
呼びつけて見たい役所の非
能率 ゆづる
更年期内助の功を鼻にかけ
一哲
本堂は子に触りたいものば
かり 法泉子
或る時は妻も観音様に見え
文夫
洗濯をする間タンスへ子を
くゝり 愛論
ほろ苦い顔でサービス料も
出し 珊枝郎
約束を破らす様な雨が降り
季賛
油断して居ればトラ
ツク子
を殺し 秋花
電話口どなたと聞いて叱ら
れる 阿茶
辛辣な批判ゆっくり喋り出
し 葉光
官庁の書類表紙のまゝ売ら
れ 摩太郎
御高説だんだん痛いところに
ふれ 多久志
(以上百二十三句)

布哇の快夢起氏から本社へ、消
息を寄せられた。日本で通用する
英語で、布哇で判らない和製英語
がある。アルサロの如きはそれで
あると味うべき言葉を寄せられ
た。和製英語は二十位もつとあ
るかも知れない。心すべきであ
る。

★

「私達」句集編さんに選句され
た路郎先生の御選句振りは、傍に
居た僕の涙のにじむ程の思出、
師が門下を思うの真情、何回も何
回も読み返しては読み返し、同じ
出版するならば、その人その人の
カラーのある句を、立派な句集を
と、その御選句は私の一生忘れ得
ない尊い思出である。一年有半、
多忙の先生が精選されたのは、柳
多留初篇の句が、七年間の万句合
から抜かれていたので、柳多留二
十四篇までの、一番すぐれている
のも宜なる哉と、側で幾多思つた
事か。

★

各地から、本社へ句会開催の寄
書を多く寄せられる結構な事であ
る。しかし、夜に開催したのか、
場所が何処か、判らないのもあ
る。少くとも十七音字中心の短詩
文芸としての川柳家の心すべき事
だと思ふ。また句会記事は、どし
どし、連絡して欲しい。「時は去
り行く」と云う事をもつと思つて
欲しい。

「旅人」「福壽草」三部作

路郎「私達」

私達

句集出版記念会の夕

於大阪親光ホテル



西尾栗氏合衆千さんから花束を受ける路郎先生

大阪ゆかりの安井道頓が開闢した道頓堀川は日本橋北詰、西へ行けば絃歌さんさめく宗右衛門町、東へ入ればきょうの会場である大阪親光ホテルが、早春の夕やみにくつきりとネオンが美しい。

水都大阪の芝居川ともいわれる道頓堀川の七つの芝居橋、東から数えて下大和橋の次がこの日本橋である。五座の橋は、今は語り草となったが、赤い灯、青い灯は今日なお大阪人のふるさとである。

この恵まれた場所で、句集「私達」の出版記念祝賀会が催されることは、まことに意義深いことである。われわれの分身ともいふべき句集「私達」の誕生日を祝いたい。

う諸氏の顔は歓びにあふれている。

「おめでとう」

「おめでとう」

久しぶりに顔を見せる人、遠来の人、握手をする人、肩を抱きあう人——熱くなつた眼がしらを、感激にふるえる指でそつとおさえる人もある。

この美しい友情で結ばれた、路郎門下不朽洞会員の処女句集「私達」の出版記念の夕は、川村好郎氏の司会ではな／＼しく開催される——32年3月15日午後6時だ。

句集刊行委員長である北川春葉博士が、われわれの恩師路郎先生に謝辞を述べる時、先生は親しく壇上より降りられて、春葉氏に向いあつて立たれ、こどもも美しい師弟愛が満場の心を打つ。

挨拶

「前略、今宵は、私共相集りまして、ささやかな祝賀の会を開

ございます。

いたのでございますが、路郎先生には二カ年の長年月を費して、御選句の労をお取り下さり又装幀製本等にも御尽力下さいまして、この様な立派な「私達」にまでお育て上げ下さいましたことを一同に代り、心から御礼申し上げます。そも／＼此の句集の出版が企画されました初めは、路郎先生の川柳生活五十年記念として出版されました世紀の大句集「旅人」の出る頃からでございました。先生は「旅人」の半分の頁は門下生の句集に当てるように、との御要望で、門下生のためにその句集を世に出すことを主張されたのでございました。先生の門下生をお思い下さる御恩情に、私共は感泣したのでございますが、めい／＼の句を集める方法など、中々の大事業で、どうしたらよいか迷って決らなかったのだ

ございます。

然るに先生は句主のカラーを出すためには、先生が一度選をされて、雑誌に発表された句を再選する必要があるからと仰せられて、御多忙な御日常にも拘りませず、再選をお引受け下さいました。そして一人二百句提出ということに決つたのが昭和三十年の初夏でございました。爾来会員の皆様の御協力を得まして集りました句の総数は無慮二万数千句という、莫大なものに達しました。その中から今回句集に収められました句は四千三百句でございます。先生の長期に亘るお骨折りは、考えて見るだけでも大変だったと思うのでございます。先生は毎日のお仕事の後、夜の十二時以後の一、二時間、或は早朝の新聞が配達されるまでの、お読書の時間を割かれて選をして下さいました

然もそれが二カ年の長きに亘つたことで、身体的労力の外に精神的御負担も、口には云えぬものがあつたと拝察されるのでございます。——中略、此の句集は恐らく後世まで残るものと確信するのでございます。なお先生の選をされた後、八木摩太郎氏が清書その他の事務処理を担当され、句集発刊に対する御尽力をたまわりましたことは、それが又長期間に亘りましただけに並々ならぬお骨折りだったと考えられます。こゝに同氏に対し一同に代りまして厚く御礼申し上げます。なお又、一刻千金の春の今宵、大阪市教育委員事務局長の方々、新聞社の方々、関西川柳界の代表の方々、並びに関西短詩文芸連盟の代表の方々におかせられましたは、御多用の中をまけて御出席下さいまして私共の会をこのような盛大なものにして頂きましたことを厚く御礼申し上げます。

昭和三十三年三月十五日

句集「私達」刊行会

委員長 北川 春葉

不朽洞会理事長西尾栗氏は、子孫に遺す「私達」の第二、第三

の句集の出ることを念願して「挨拶」とされた。

路郎先生は満面に笑みをたたえられ、わが子の誕生を心から祝福されて、苦節五十年の川柳生活を川柳社化運動に捧げ消えることのない情熱の炬火を「所感」の中に赫々と燃やされる。

西尾栗理事長の令嬢杏子さんから花束をうけられる、われらの恩師路郎先生も余程うれしかったとみえ、花束を高々と差上げ会場のわれ／＼門下生にこたえられるお姿が印象的だった。

八木摩太郎氏に感謝状が贈られると、来賓席から次々と起って祝辞をたまわる。

小野十三郎氏（関西短詩文学連盟）多くの「詩集」「歌集」を見たが、川柳句集「私達」は非常に立派だった。

西藤壽太郎氏（大阪市教育委員会事務局）役人は、ことがあると代理を出すと麻生路郎先生に叱られたことがあった。きょうの私は代理ではなく皆様にお祝いに参った。

岸本水府氏（香々川柳社長）

不朽会員の「私達」は、関西川柳界の「私達」であり、また日本人の「私達」でもある。また柳多留初篇七年間の歳過七百五十六句に劣らぬ「私達」も歳過である。

良い本が出てうれしい。

堀口魁人氏（さつき川柳社主幹）なによりも頭がさがったのは現役以外に故人の句が出ていることである。かはる氏等がそれだ。路郎氏をもち育てた人、内に霞乃夫人、外に縁雨氏等がある。

岡橋宣介氏（せんば川柳社主幹）精魂をうち込んだ句集で世に問う。句集が自分の手をはなれたらもう自分のものではない。ただ批判にまかすのである。私は本書の出たことを心からよろこぶもの一人である。

岩崎愛二氏（NJB国際室長）川柳をうんと勉強して、次ぎの句集が出る時には百句のせてもらうようにする。そうして皆様のきょうの歡びを私も味わってみたいと思う。

川維ハワイ支部を初め川維各支部からの祝電に感謝の拍手が会場を圧する。

若本多久志氏の閉会の辞が終れば舞台は一転懇親宴の酒座となる中島生々庵博士が無踊でサーピスをされるころは宴たけなわといふところ……

川維の合言葉。

「いのちある句」を、創れ、創れ、創れと三唱したとき、時計の針は九時三十分をさしていた。

（文責 不二田 一三夫）

祝電

川維ハワイ支部・川維岡山支部・永松東岸子・川維米子松露川柳会・川維青枝支部・鳥取川柳会・川維倉敷支部・川維下関支部・川維京都支部・川維小松支部・川維弓削支部・川維大聖寺支部・川維篠山支部・川維米子支部・平塚市木村孤浪・

出席者（敬称略）

★麻生路郎（本社）・岸本水府（香々川柳社）・堀口魁人（さつき川柳社）・岡橋宣介（せんば川柳社）・小野十三郎（関西短詩文学連盟）・西藤壽三郎（大阪市教育委員会）・片山喜之（同上）・岩崎愛二（NJB国際室）・富岡淡舟・西尾栗・松江梅里・中島生々庵・中島小石・木村十悟・伊達環子・若本多久志・友淵貴山・土井文蝶・八木摩太郎・川村好郎・山川阿茶・正本水客・菊沢小松園・北川春渠・黒川紫香・菊田いさむ・大阪形水・木場康治・高鷲重純・小西無鬼・伊藤茶仏・武部香林・西尾青一路・児島与呂志・丸尾潮花・松川杜的・牟田一哲・橋本緑雨・新川博也・須崎豆秋・和田一乃字・浜畑胡蝶・石井正治・長谷川三司・後藤梅志・清水白柳子・金井文秋・木口賀峰・市場没食子・戸田古方・西森花村・太田良子・西尾杏子・不二田一三夫・麻生霞乃・

不朽洞

会から

▼「私達」出版記念会実行委員会——三月三日午後二時から本社で開催、春渠、好郎、栗、多久志、文蝶、摩太郎の各実行委員参集、種々打合せをした。なお、三月九日午後六時から再び同委員会を生々庵居で開会、生々庵、春渠、栗、好郎、文蝶、梅里、摩太郎の諸氏出席。

▼常任理事会——二月二十三日午後七時から三十二年度第二回常任理事会が三休橋の生々庵居で開催された。出席者は路郎先生の外に生々庵、栗、梅里、文蝶、紫香、潮花、摩太郎、好郎、古万、阿茶、水客の諸氏。

常任理事の担当部門を、総務、企画、連絡、句会、記録、会計の六部に分担して会務能率を上げる事となった。なお、川維各支部并に川維系各団体は句会其他諸会合の散会の際「いのちある句」を作れ」と司会者の発声に「作れ」「作れ」を和唱、散会する事に決定した。

▼田中勉氏、政田大介氏は二月限り、大橋游子氏は三月限りで退会された。

▼二月号で発表した出口白猫兄氏の入会は誤りにつき取消しする。

★新会員紹介——三月入会

岡沢凡志氏（兵庫県）正会員
宮口笛生氏（奈良市）正会員
春渠氏推薦
無鬼氏推薦

榎本路児氏（大阪府）正会員
池戸桃村氏（大阪府）正会員
史葉氏推薦
石坂新雪氏（米子市）正会員
城内吾柳氏（米子市）正会員
美笑氏推薦

社の黑板

★川維小松支部を三月一日、石川県小松市大和町伊藤方に新設した。支部長伊藤茶仏氏。

★川維明和病院支部を三月二十四日、阪神電鉄鳴尾駅下車北の明和病院に新設。支部長西尾青一路氏
★前号で発表した大阪中之島、中央公会堂に於けるソ連の文豪エレンブルグ氏の文芸大講演会は、エ氏の来日が世界平和委員会の日程の変更延期で四月十日日本着となるので、勢ひ延期されることとなった。講演会の日取は新聞紙上で御承知願いたい。



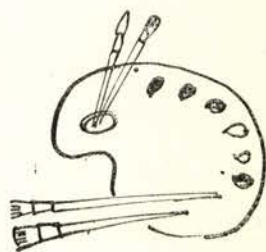
蝶矢の
ウエスタン シャツ
東京 蝶矢シャツ 大阪

雑筆

春秋

笑いと川柳

中島可十



「笑い」は人類だけに授けられた特典であるようだ。そうかも知れない、笑うことと自殺することの出来るのは人間だけだから。してみると、その特典を活かすのは人間の義務の一つであって、人生笑って終始する人はまことに幸福であるということになる。巧利的な言い草のようだが「笑う門には福きたる」という俗諺も、まんざら真理がないのではないようだ。幸福であるべき健康は、いつも「笑い」と結ばれているからである。

アメリカのシンドラーという医者は「笑うことは健康の特効薬である」という意味のことを、「三百六十五日をどう生きるか」という著書で述べているそうだが、たしかに「笑い」は安上りの健康法にもなり、いろいろな病気の予防業にもなることが、医学的にはきりした根拠が認められる。

例えば、いつも朗かで明るく笑

っている人にノイローゼ患者は少ないし、のん気な人が比較的良好な例である。また極端なのは、笑って胃潰瘍が治ったという人の実例もあるくらいで、笑いが人間の健康によいことには間違いない。一口にいうと、精神的に安定感があると病気になるという人にもなる。高血圧、リウマチ、神経痛、ぜんそくなどのような、血液循環に関係のある病気に効果のあることは、医学的に証明されている。

では「笑い」は、どうして体のためによいのかというと、人体の内臓を支配する交感神経というものが、感情がたかまつたり緩んだりする起伏に深いつながりを持っていて、交感神経の活動がたかまつてくると緊張とか興奮の状態が起り、逆に感情がゆるんでくると副交感神経が働き出す仕組になっている。つまり交感神経の活動がたかまつると胃の消化がとまり、副交感神経が働きだすと消化をたかめるといふ具合である。だから笑うと、交感神経の緊張がゆるんで副交感神経が作用することになるから、いつもニコニコしておれば食欲も出てくるし、胃潰瘍の人でも早く治ることになり、血圧の高い人は、笑うと緊張がゆるんで自然と血圧も下るといふわけである。

それなら、いつもゲラゲラ笑っておりさえすればよいのかということになるが、笑いは外部からの刺激によって表現されるので、その刺激の種類とか、うけいれる方の感情の持ち方によって笑い方も違ってくる。だから笑いにもいろいろな型がある。精神分裂病のうちの多幸症という精神病者は、見るもの聞くものすべてが嬉しくて世界中が幸福に満ちているような気がして、一日中ニコニコ笑っているのがあるが、このような病的な狂笑は論外であって、ここであいう「笑い」は健康的な笑いでなくてはならない。

笑いには、無心に笑う赤ん坊の笑い、箸のころげたのおかしな少女の笑い、思わず吹き出す笑い、可々大笑する豪快な笑い。内容が少し複雑してくると、希望の活路をひらいた破顔一笑もある。また失意の中から微笑するものも笑いであるともいえる。そのほか日常生活の中から笑いをひろつてみると、冷笑、嘲笑、爆笑、哄笑、媚笑、黙笑、泣き笑いなど、中には笑いたくても笑えないというような念いりの笑いも笑いである。こうして気のついた笑いだけでも数えてみると、笑いごとでないほど沢山の笑いがある。

この笑いを心理的に分けると、積極的(陽性)な笑いと言極的(陰性)な笑いがある。人が滑って転んだのを見て吹き出す笑いとか、自分が相手に対し優越感を抱いた場合の笑いなどは積極的な笑いである。嘲笑、冷笑、苦笑といった類のものを消極的な笑いということができる。

さて、天賦の特典というべき笑いには、このようにいろいろの笑いがあるが、その笑いは、川柳にもまた大事な要素の一つであることを付け加えたい。

およそ川柳から「笑い」を取除くことは出来ないだろうし、笑いのない川柳は意味がない。川柳が庶民詩である以上、人間生活のあるところ必ず川柳が生れる。そこには必ず笑いがつきまといっている。つまり笑いは、人情のうがちとか、社会のふうしとともに川柳の本質であるからである。人間の喜怒哀楽いずれの感情にも内在する「笑い」の詩性から、必然的に要求として生れる生活詩が川柳であるとも言える。したがって笑いのある川柳は、人の笑わないうところに笑いを見出し、笑わないうものを笑わせるところに面白さがある。それが川柳の味ともいふべきものであって、言いかえると「川柳味とは笑いである」と簡単に答えることができる。

だからといって内容が下劣であったり、腋の下に手を入れて笑わせるようなクスクリの笑いになる狂句であってはいけない。川柳の初心時代、この狂句があったものを本当の川柳かのように心得、興味を持ちやすいものであるが、本当の笑いのある川柳とは、あくまでも文芸的詩性のある句でなければいけない。そして作意の上から真のユーモアを発見することができて、そこから誰でも笑いがこみあげてくる内容のものでなくてはならない。

ところが最近多くの川柳は、そうした「笑い」が抑えられているような感がある。かつて富士野鞍馬さんが「笑いの川柳を作っても余興には面白いが、佳吟秀句にはならないからと、作者も選者も笑いの句を高く評価しないようになっていたのではあるまいか」というような意味のことを書いておられるのを読んだことがあるが、至極同感である。名句でなくとも人の心を朗明にするような笑いのある川柳もあつてほしい。毎月多くの柳誌に沢山の川柳が発表されるが、笑いのある川柳は案外少ないようだ。ただひとり川柳に発表される川柳の中にのみ多くの笑いのある句を発見できることは嬉しい。

ともかく、人間の特権として授けられた「笑い」を、お互の健康のために大いに笑うのも結構、その笑いの中から川柳を生み出し、

人の心をいささかでも明朗にすることが出来たらなお結構ではあるまいか。

これでよいのか

金井文秋

先日或る句会へ来られた某氏が私は初心者指導の為の句会を持ち何年も楽しくやって居たが、最近我れこそ古参者なりベテランなりと次々と来られるが、その人達が時には二十句も出句されるので初心者の句が見栄えがしない、せめて三四句に止めてもらうかその人達の句を別に選をするようにしたい、そうでないとだん／＼出席者が減ってくる。など他支那から来る柳人達の為に平和が乱されると言わんばかりの言葉であつた。

他の支那から参加される人達は川柳に熱心であり、一つにはその指導者の独自の批評に魅力を感じている為であつて、初心者の多い中へ行くのだから句が多く抜けるの、自分の名を売りたいのと言う気は少しもないはずである。むしろ自分も初心に還り共に相携えて行きたいが為である。

どの句会へ行つても他支那からの出席は大変喜んでくれる、句会にもぎやかになるし初心者も刺激され鍛錬されて作句力が伸ばされて行くのではなからうか。

初心者の中には自分の句がレベルによつて抜かれたとも知らずに悦に入つて居る人もあるかも知れないが、幾人かの人達は小集から大句会へ難詠へと伸びて行きやがて一家を成して行くのである。

各支那によつて初心者の多い所もありベテランの多い所もあるが出来るだけ上手な作家に交り、自分の句を伸ばそうとする心が上達の道であり、そのように指導するのが主催者や世話人の道であると思つて居る。

先の某氏の言葉が初心者の意見を代弁しているのなら、ざる／＼で楽しんで人達へ助言するような真似はしたくなからうから、参加を遠慮すればよいのだが、問題は某氏の考え方である。鶴に抱かせた卵でも全部が全卵孵らないように何人かはスランプの壁につき当り柳界から消えてしまふものである。

出席者が減つたからと言つて、その責任が来会者にある如く言うのは以つての外であり、初心者育成にマイナスになつても決してプラスになるものではないのではなからうか。

床柱

木山遠二

誰それの筆になる幅だ、懸額だ、やれ何焼の布袋だ、狸だ、い

や何々流の生花で御座い等々、およそせたく三昧の代物を側近に侍らせ、これ等の統率者然として納まつて居るのが床柱である。いやにつる／＼と磨きをかけて、てかてか底光りして居るところは、相当の年配を経た禿頭を思わせる。

この床柱が人間を惹きつける底知れぬ力を持つて居るんだから不思議である。

人間、不惑にも達すると大抵この柱に魅了され、何とかしてその近くへ坐ろうと焦るものである。多勢の席に於て特にその傾向が著しくあらわれて来る。

ノイローゼにもいろ／＼あるように、これにも矢張種々の型がある。その二、三を茲に並べて見る。

自負型——家柄、役目柄、顔役等で、誰に遠慮も積もなく自覺的に堂々と床柱を背負つていゝ氣もちになるもの

他力型——「あんたにそんな処に居られたんでは、他の者の坐る場所がありません。どうぞどうぞ」と三回乃至五回位、主人やら傍の者に繰り返され、揚句が手を引張られ腕を押されて設々／＼と本望を達するもの

便乗型——心ならずも遠慮してる奴を、いきなり抱えて目指す場所へ持つて行き、其ほとりへ自分もうまく納まるもの

れつこない我身と知つて、せめて敷居の内側へ座を占めんものと、モジ／＼ソワ／＼

敷え上げると際限がないのでこの位として、さて斯の如く不可思議な魅力を持つ床柱もわが川柳並木会に於ては、てんで一顧も与えられないのだから妙ではないが、故意に無視する訳ではない、川柳へ傾倒する者には、床柱の魅惑など一向に感じないのである。だから偶然の廻り合せで、床柱のスベ／＼した肌が己の背に触つて

味のコー

モダン 川柳

心育橋大丸北の辻東へ

御門

TEL 06684

句会のお集りにどうぞ★

来ても、別段いゝ氣持にもならず、反対に床柱を遠く向うに眺める位置に座を占めて居ても、つらくも淋しくもないと云う訳である。では並木会に面々は何型に嵌るか？ さし当り床柱不感症型とでも云うべきだろうか。

肴の名

木村十悟

年令、職業、柳歴何れも大幅に区々に複雑な並木会員間でも、もしそれ床柱争奪戦でもあらうものなら、席題を考える時間には丸潰れとなるであらう。不感症型こそ善哉々々である。

「お帰るなさい。」
「ウン。」
「お疲れさま。」
「ウン。」
「すぐ、お銚子をつけましょうか。」
「ウン。」

この時は、ウンが一つふえる。シャッポン、洋服を脱げば丹前姿食卓にはお酒の用意が出来て居る。還暦もつくに過ぎた老らく同士の差向いである。

「肴は？」
「あなたの大好物のものですよ。」
「あゝ、アレか。」
「キョーと、五臓六腑にしみる百薬の長。」
「いつ、食べても旨いネこの肴。」
「これは、豆秋さんの日曜以外の日の一コマである。」
「その旨いサカナって、なんというサカナですか」ときいたら、
「君、ハゲというサカナを知っているかい？ アレじゃよ」



川柳第二教室

作句指導

戸田古方

研究題「阿呆」

阿呆く其の阿呆はたれの
子や 真奇

調子からいって「阿呆く」と二度くりかえすより、も一つ加えて三度にした方がよくなります。それから「其」の字ですが、わざわざ漢字にしないと「その」でよいと思います。「阿呆くく」とすると次に漢字でももってこないとしまりがないように感じて、漢字をもつてこられたのでしょうか、むしろ「阿呆阿呆阿呆」と漢字をならべますと「その」はむしろ仮名でうけた方が自然になります。そのあとへもう一度「阿呆」が来て四へんも出てきますが決して目障りにはなりません。まず親子の關係に於てながめた阿呆な子の抗議もさりながら、親の目は阿呆な子程ふびん

がりがり
阿呆はど行末案じる親心 八文銭

と親鸞の嘆異鈔の「善人なほもて往生すいわんや悪人をや」をじかになげつけられた句境には引かれるものがありますが、充分ドキンとさせる題材がありながら、そうならないのはこの両句が正面切つてのべようとしているからでもつと推敲しなればなりません。出来のわるい子のいる家が案外榮える例をいくつか知っています。が、親が徳をつみ、金をつんでこの不びんな子の将来の光明を期すというのでしょうか。そういう家の繁昌の動機になっている出来のわるい子を「福虫」といいますが、想を縦横に働かせてテーマ表現のために努力すべきでありましよう。

しかし世間から見ると阿呆は阿呆、賢しこは賢しこ批判されます。しかし阿呆は阿呆なんでしょう、駄目なんでしょう。阿呆とは何んでしょうか。経験と認識と判断が世間並に具わった人が常識ある普通人です。経験や認識や判断はそのみなもとに怒があると考えられます。常識ある人とは普通に怒をもった人です。しかし怒は迷を生じ又苦しみのみなもとになります。阿呆はこの怒が少く、したがって苦しみを感ずることも少い。修養をつんだ聖者の寡慾に通ずるものがあります。大賢は大愚に通ずるといふのもこのことであります。

賢しこ阿呆というのは常識人が細かく神経をつかつて完全になろうなろうとしながら、人間の欠点をますます露骨に出してきます、たしかにこれは賢しいとはいへません。反対に阿呆賢しこというのは阿呆なんでしょうが、その寡慾が現れた行為の上では常識人をうらやますといったところでしょう。主題が阿呆でしたので阿呆賢しこの方が大分多かったです。たゞうらやむだけでなく冷静にこれをながめ、修養を一步進めようとする意欲はさすが柳眼の士の集りという気がしました。

逃げ 千永
大分経験のおおりになるお万と

みえます。こゝには本当の阿呆は出ておりません。

阿呆くくと云うてた奴の出世ぶり 錦花

阿呆にみえて阿呆でなかったのでしょう。なりふりかまわず真実一路、何か真理にふれ得たのでしょうか。

目的に阿呆馬鹿聞きとれず 辰始

類句類想ははじめの句にありそうだし、あとは内容の面白さに表現がそつていないようです。

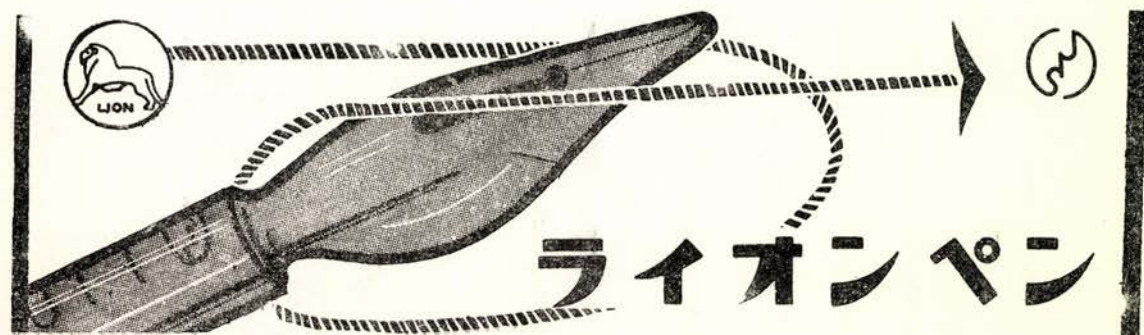
阿呆かいナそうやですませる老夫婦 柳香

気安さが妻を阿呆と云うてみる 堯二

阿呆です阿呆ですよと倦怠期 周甫

阿呆くく死体にするが彼女泣く みちる

夫婦あるいはそれに類するものゝ間の阿呆よばわり、勿論本当の阿呆でない。前の二句は極く軽い阿呆、二句のうちでは前の方がよさそうです。あとの二句は自分を阿呆呼ばわりすることで「倦怠期」の方はすねています。あとの死体の句は、勿論死んでいるのですがその相手にくどいています。自殺と病死とでは大分感じがちがってでしよう。この場合「彼女」は不要です。その代りにおくことは工夫するとよくなるでしょう。



喋らねばいゝのに阿呆の口がすぎ 喜楽
阿呆だといわれそうかいなと思ひ 美舟
阿呆には見えすひとみの美しく 一角
阿呆にも喪服が似合い母がなし 文平
他人から見れば阿呆は面白く 豊平
阿呆だと云われ阿呆は笑うて居 花車
阿呆にされこども相手のおもしろさ 登
慾目でも阿呆に見えるほどの阿呆 阿茶
阿呆ふと金の力を感じる日 実男

阿呆自身を扱った句をならべてみました。皆そこそこいけそうな句なんです。悲劇あり、喜劇あり、悟つたようなの、いろいろありますが、御本人案外悲劇でも、喜劇でも、悟つたんでもないでしょう。心理学という感情移入の作品ですね。さすが悪意の句のなひのは、阿呆はほんとに神に近いのでしょうか。

猫の恋追ひ掛け廻す阿呆な奴 真路

他所目には阿呆らしからうが惚れてます 義夫

阿呆なことといったが聞きたい事もあり 自然

阿呆になろうとしないで、他人から見ると阿呆に見えたという種

類。いたずらに字の数が多いう印象しかうけません。ほんまの阿呆こんな絵描けまっか 静観堂
山下清は阿呆か天才か私はよく存じません。しかし人間一人一人が阿呆な要素をもち合っているように又伸ばせば伸びる長所をもっているのではないかと人生を明るくしてくれます。
阿呆にも解るせりふでストリップ 水鏡子
ストリップが健全娯楽かどうか。人めいめいの考え方によるのでしょうが「解るせりふ」というのに大衆に愛される所以があるように思います。

金泥集

麻生霞乃選

課題「夫」

夫には内緒の株の値が下り手引いて呉れたあの日でない夫 千代美
無緒ヒがあわれ腹歴書かく夫 同
妻の座にいるが夫は二号宅人様のハスへあれこれメスをむく 同
うのお方と云つて母をふと憶い 同
来世は夫たらんと肚を極め 同
いつてつたやい 働きの様に 同
へそくりでつかり夫のものも買 同
釘ぐらい打てよと夫うってくれ 同
信じてる夫へ浮気など平気 同
日曜の夫へあまえて見とうなり 同
共稼ぎ夫の傘に迎えられ 同
久米子

スクリーンで売る阿呆顔苦心する 恵三朗
阿呆役又むつかしい哉です。「阿呆顔」と「苦心」の間にデニオハのないので「苦心」クローズアップされています。
大器晩成型かと阿呆の子を眺め どんたく
入学へ阿呆とは見えぬ顔で居る 湖鳥
手放して親の死目へ阿呆泣き 白溪子
子から親を、親から子を、阿呆はいろいろの話題を投げかけています。阿呆なればこそ手放して泣けるのでしょう。属あんどなどといわれた大人たちの事も思い出さ

れます。紐つきの入学の子供が阿呆とは限りません。阿呆も幸多かれといふたくなりませう。
正直を陰で阿呆と言わしと 牧人
大悟の境とも見えますし、非常にごうまんな私の強い句とも見えます。この句から正信偶(親鸞作)の「極重悪人唯称仏我亦在彼撰取中」の一説がしみじみ感じられました。
研究題「新顔」
切 四月十五日
発表 六月号予定
投句先 豊中市本町三丁目 二〇一
戸田 古方

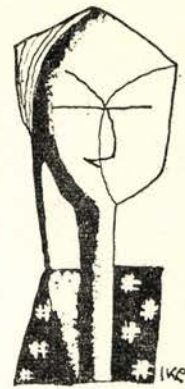
名ばかりの夫へ苦勞絶間なく 同
何事もなかつた顔で帰るヘル 良子
惚れたのは昔でしたとへんに云い 同
うちの人だけはだれと信じ切り 小石
アササリーのうに夫をつれ歩き 同
刑事でも妻のへそくり見破れず 白美
見てはいいパーマ気付かぬ夫なり 同
浮気する夫へ紐もつけられず 百合子
甲斐性なき夫なれども吾がナイ 星女
妻ドライ夫ウエツトでつつかなく 同
子沢山夫の靴もちびており 知恵美
奥さんにすまぬ日もあり行き過ぎて 紫草
病むよりもましと夫へ酒をつぎ 周甫
死んでから夫のよさがよく判り 徳子
子を叱る角度が違ふ夫妻 風の子
妻の愚痴笑つて済ます応揚さ 沙智子
ダイヤルも夫の趣味に合はる 清子
呼び捨てにしない夫でも足らず 花鶴美
柳絮

失業の夫と子の待つ灯の明り たつよ
子の手前酒乱の夫もてあまし 小菊
ホルモンを打つて夫は違者なり 美喜
秘密などもたぬ夫との気が揃い 美保
妻病んで夫の不精眼に余り 綾女
産室へ夫手製の食事出来 美子
不器用な夫を使う妻の風邪 美子
ケーセラ／＼夫が来るにつの日か 美子
お白酒今日は夫もほほをそめ 香月
台風へ夫の釘を不安がり 俊江
怒りなや云うて二号ののけ言 若芽
夫にはないしよすの貯めて 若芽
倦怠期夫の趣味はほつとかれ 美舟
妬くことも妬かれることもあり 都詩子
切開の痛み夫と共に堪え 柳香
妻だけに聞かせて評論大家で居 千永
失業の夫へ一日子をあずけ 貞子
うしろをさかかく電話かゝつて来 霞乃

川 雑 ト ビ ッ ク

坊やが、部の山田
ダダをこ 季賛氏で
ねると父 ある。句
ちゃんば 雲部の感
句が作れ 激もさる
ないヨ 子連 ことな
と、三 ら路
月句会 出席 郎先生
で子連れの居 びは非常
席者が人目をひ いた。はるばる
に大きい
広島より本社句 一眠がう
会本年度全出席 るむ美談
を目指す広島支 だ(F)

一路集



鳥籠

正本水客選

小鳥籠見て見ぬふりの老いた猫 与根一
鳥籠の雛が隣の子に魅力 凡茶
鳥籠も出して隠居所日が当り トン坊
鳥籠のようなアパート住んでる 古竹
献上の鳥籠赤い縋を垂れ 柳叟
伏せ籠で一声高く勝負鶏 東雲楼
鳥籠へ気持だん／＼ほぐれて来 夷男
鳥籠の中で羽ばたくだけの夢 凡太郎
飛ぶことも忘れて籠に安住し どんたく
大空を忘れて小鳥籠で鳴き 恒雄
鳥籠の世話しておれば食える人 隆文
鳥籠の中と知ってかもう飛ばず 満秋
馬鹿でかい鳥籠インコが一つがい 豊年
鳥籠はガラス戸越しの日本間 辰始
鳥籠は南蛮渡来床に置き 光郎
鳥籠の見舞が屈くいい身分 高志
もう飼わぬつもり籠のまゝゆすり 月都
夕立が近く鳥籠風に揺れ 七面山
鳥籠の中はトンボがぶら下り 味平

クレゾール匂う廊下の小鳥籠 須賀太
九官鳥覗けばいきなりバカヤロー 芳仙
玄関へオームの籠を派手に置き 十九平
触れ合ひし鳥の命へ籠が揺れ 雅人
鳥籠があつて守銭奴とは見え 晃
春のオーム籠のまわりの人と呼び 初甫
鳥籠も春の近さを意識させ 圭水
鳥籠へ口笛を吹く子が戻り 美舟
鳥籠のある私室へ招じられ 伊津志
鳥籠へ刑事聞きたい事ばかり 越山
二日酔の上に鳥籠うるさいね 五茶
アラマアア鳥籠草月流に出来 恵二朗
ふと見れば小鳥もある寝息そ 沙智子
鳥籠をチョイトゆうつて税吏去に 一雨
鳥籠に餌をやつては話しかけ 黒天子
人間の気まゝ鳥籠からのぞき 代仕男
覗つていぬ鳥籠を吊る舞台 葉光
めじろ競馬会

風呂敷のまゝ籠の声近づける 八九寸
礼服のまゝ鳥籠の水を替え 文平
(佳)鳥籠の世話の日記が入選し 葵丘
(佳)鳥籠をのぞけば愛し愛されて 香林
(佳)鳥籠も入れてスターの訪問記 永断
(佳)小鳥店夫婦々々の籠を吊り 牧人
(佳)長思と見えて鳥籠なども吊り 不二
(佳)鳥籠が見えるアパート窓を開け 白溪子
(佳)鳥籠の向うへ冬が透いて見え 鬼美
(佳)愛鳥を待つ春翠の小鳥かご 沙智子
(佳)鳥籠へ厚子夫人の目が細く 恵二朗
(佳)鳥籠へ朝日射すまで小半時 客遊子
(佳)鳥籠へ口笛吹いて通り過ぎ 夜潮
(佳)鳥籠へ朝の音楽いれてやり 高史
(天)鳥籠の広さを知つた羽根で飛び 幽谷
(軸)焼跡の鳥籠へ来てしやがみ込み 水客

貸本

八木摩天郎選

貸本にはさんであつた他人の恋 与根一
貸本を寝ころんで読む中二階 葉光
火の上で読む貸本まくるなり 庸佑
貸本から女名前の乗が出 牧人
宿直の夜長貸本読むとする 古竹
貸本の漫画探せば父が読み 雷山
貸本屋自分の好きを貸したが 俊江
貸本に読まけろと書いてある 晃
貸本屋お客の趣味をよく見抜き 雅人
趣味読書などと貸本ばかり読み 錦花
落丁もある貸本の垢の艶 恒雄
貸本屋小学卒やなと思ひ 高史
貸したる本から恋が芽生えて来 芳仙
忍術の本もまだ出る貸本屋 淀月
貸本の染みをきたなく読み飛し 味平
貸本へ涙で濡れた痕があり 夜潮
貸す本を読み不景気な貸本屋 雄々
貸本を下女こつそりと床の中 白水
貸本へ女らしさの花菜 光郎
貸本屋知能指数を知つており 満秋
貸本で興義覚えた詰将棋 辰始
本棚の隅へ貸本忘れられ 湖鳥
貸本を移転先からことづける 定月
貸本の漫画冷たい手を忘れ 井蛙
呼び鈴に貸本し／＼伏せて立ち 勝三
貸本の様には行かぬ娘が二人 井蛙
貸本屋子供が好きでよくはやり 勝三
貸本と知らず友達持つて去に 勝三
貸本の探偵小説今佳境 勝三
貸本をマダムこつそり貸りに来る 勝三

貸本もしますと書いたやきいもや 藤波
貸本で食えるわけではないけれど 恵二朗
新刊も揃え客引く貸本屋 祥月
貸本屋神武景気はこゝへ来ず 五茶
貸本の智識で親へ口答え 水堂
完全消毒してまうと云う貸本屋 靖真
貸本屋やつて定年生きんとす 雄声
回覧の雑誌クイズは間に合わず 八九寸
貸本のまんがが年を忘れさせ 黒天子
ベストセラー五六八読んで返り むじな
借り賃が十円違つと読み急ぎ 月都
紛失の貸本高う／＼つき 美舟
貸本屋のぞけば炬燵起き上り 鬼美
貸本で髪を剃るのをわすれられ 季贊
貸本ややれ保証金の通帳の 進之助
講談本借りて旅籠の雨に寝る 春吉
貸本屋汚したなあと云う目付き 実男
明眸の書見貸本とは見え 東雲楼
貸本の手垢を母がきたながり 代仕男
貸本を陽溜りて読む病上り 不二
だらしない寝相貸本抱いたまゝ 可十
貸本に浮世絵もおく商売気 高志
貸本の次男へ続く馬鹿らしさ 三林坊
貸本屋それ程本は読んでいず 七面山
貸本はど稼いでほしいうちの人 春雄
貸本へ鼻毛を抜いて並べとき 柳叟
貸本屋こつそり見せる本もあり 養流
貸本屋仕入れて置くと如才なし 凡茶
(佳)貸本屋フロクは別に貸すつもり 圭水
(佳)なじめには発禁までも貸してくれ 沙智子
(佳)貸本の此処は映画で泣かすところ 白溪子
(佳)売本となる貸本のなれの果て 義夫
(佳)貸本や特飲街の風へ来る 客遊子
(地)貸本へはさんであつたメツセージ 千谷
(天)貸本屋自分が読んでから貸せる 十九平
(軸)他人の名を借りて貸本日をはし 摩太郎

いのちある句を創れ



投稿規定

▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月二〇日▼投稿先
本社宛

本社 三月句会 (大阪市)

三月七日 午後六時

於 光明寺

南極で立往生した宗谷が、ソ連砕氷船
オビ号に救出された朗報があるかと思え
ば、Xマス島の水爆実験を中止するため
に船団座込みで、英国へ死の抗議をする
という。川柳の世界は救出されたり座込
みをせぬよう文学に挑まねばならぬ。

句評、川村好郎氏はカルメラ焼哲学で
時期と年輪を説かれ、年末年始の句から
豆萩、不水、妄夢諸氏のベテランの年季
の入った巧さを語られた。

路郎先生は、口語俳句のことを説か
れ、川柳は昔から口語川柳(多少例外は
あるが)である。近ごろの口語俳句の多
くが名詞止めであるためにぎこちないの
である。川柳でも名詞止めの多くは拙い
句が多いことを詳細に説かれた。

広島山田季貸氏が今日は可愛い坊ち
やんを連れてのご出席。はるばる広島か
ら、本年は全出席をされるという。この
熱意を京阪神の作家に訴えたい。

本月から、司会者が、
「いのちある句を」と叫ぶと、満場それ

にこたえて「つくれ!」を三唱して閉会
することになった。

サンと輝く三月の不朽洞賞杯は長谷川
三司氏が握られた。(F)

出席者「路郎・一三夫・庸佑・利武・

須賀太・十悟・村雲・淀月・梅志・好祐
・季賛・淡舟・玄武洞・杜的・飄太・凡
九郎・義弘・晃・留一郎・与呂志・水茶
・いさむ・紫香・花車・堰子・葉乙女・
武助・静馬・月都・辰始・文蝶・三司・
水堂・万葉・仙月・旭・多久志・進之助
・春風・寿々女・英峯・樞里・まゆみ・
永断・博也・没食子・栗・香杯・井平・
立兒・摩天郎・文秋・牧人・潮花・好郎
・鵜花・高志・清五郎・雅集・樹峰・繁
雄・いわを・白柳子・毅・柳宏子・恒明
・宏子・霞乃・

兼題「外泊」 麻生路郎選

四五日は泊って来ます原稿紙 万葉
旅に出たはずが市内で泊ってて 阿茶
産み月の妻を外泊気にしだし 恒明
外泊の理由へ妓も智慧を貸し 高志
鉄砲玉ねえと外泊いためつけ 一三夫
一泊と云うのに仕度の大げさな まゆみ
恋人が出来たか猫まで外泊し 一三夫
外泊がしたいがすり餌気にかかり 栗
外泊に馴れて宿帳ためらわず 淀月
外泊の償いと云う帯を買 高志
事務多忙と云う外泊に女連れ 文秋
外泊のそれからするべつたり 淡舟
外泊の味公金を使い込み 笛生
手みやげを忘れず外泊帰って来 凡九郎
外泊へ今からうるさい女の子 阿茶
外泊の悔はオーバの袴を立て 香林
誘われてした外泊は落ちつけ 淡舟
外泊で寝酒が欲しいとも言えず 指月

一人寝たのに外泊怪しまれ 千里
外泊へ母は用心しろと云い 逸人
外泊と知らずヒソッて待つて居り 文秋
外泊へ抗議辛辣女の子 与呂志
外泊を嫁の至らぬ故とされ 堰子
朝がへり女房無気味な程黙り まゆみ
外泊へ丁度よかった私鉄スト 三司
まあ泊まって行け云わね泊まれる身 路郎

兼題「えくぼ」 土井文蝶選

仲人は顔よりえくぼのことをい 庸佑
彼氏へえくぼの出る方ばかり見せ 満秋
美人ではないがえくぼでお気に入り 文秋
片えくぼだけが取柄でまだ嫁けず 好郎
嫌われていてもえくぼへ通い 水堂
印象的だったえくぼ旅の恋 栗
赤ん坊のえくぼをみながら突付き 永断
拗ねているえくぼについて仲直り 梅里
又嘘を憎い男の片えくぼ 寿々女
勿体ないえくぼは電話交換手 万葉
売出しは派出所にえくぼを宣伝し 水茶
縁談がやつときまつた片えくぼ 博也
片えくぼつい値切のを止めさせて 与呂志
藁藁もえくぼの姉ちゃんを 十悟
看板のえくぼへ悪い虫がつき 利武
母さんのよいとこが似る片えくぼ 玄武洞
片えくぼ横顔ばかり写させる 恒明
印象に残るえくぼの計に出会い 淀月
滑り台カメラがえくぼを強いて居る 川柳堂
ウフフフと返事をせず笑い 東岸子
歳の勢かえくぼとシワがみついた 没食子
不細工な顔へえくぼが見直され 雅集
純情なえくぼちやつかり金を蓄め 晃
うんよつやをへ目尻下げて居り 井平
何人も欺したえくぼとは知らず 多久志
毎度ありがたえくぼ釣銭に添え 淀月

兼題「貧乏神」 清水白柳子選

貧乏神世帯盛りの隙がなく 笛生
貧乏神誰も拜んでくれぬなり 淡舟
貧乏神破れ障子のかげで聞き 梅里
転び込んで二階で寝てる貧乏神 牧人
七転び転んだまの貧乏神 六竜子
札束へ貧乏神が目を廻し 水茶
競輪にうろうろしてる貧乏神 静馬
神棚も無いのに貧乏神が住み 多久志
貧乏神もあきれほど生計むき 水堂
貧乏神一家心中で腰を上げ 寿々女
長男就職貧乏神が立ち上がり 好祐
貧乏神やつぱり露路を踏んで 花車
貧乏神親の代からというけ 仙月
貧乏神でも死神を怖れてい 晃
貧乏神はあんたでござと揉めており 飄太
貧乏神だまって夫婦喧嘩聞く 凡九郎
貧乏神やくざの兄が無い戻り 堰子
貧乏神庄助さんとうまが 村雲
貧乏神売食いさせる薬瓶 寿々女

ニコソンの酔貧乏神もあきれて
手の豆が貧乏神を追ひ払い
花嫁が来てから貧乏神が去に
家計簿を一寸見てくれ貧乏神
甘い顔見て貧乏神にじり寄り
質屋までくついで来た貧乏神
女房をかえても去ぬ貧乏神
貧乏神勝氣な妻が寄せ付けず
死神へバトンを渡す貧乏神
貧乏神夜逃げをしてもう行き
貧乏神破れた団扇もって居り
これしきのこと貧乏神笑い
正直が貧乏神と相住い
貧乏神うちで余生を送る氣か
貧乏神だったと過去帳書き年ら
貧乏神に好かれ景氣に乗り遅れ
福の神貧乏神とすれ違い
貧乏神猫背の父を追いまわし
振り切ったのについてる貧乏神
白柳子

兼題「寶石」

丸尾潮花選

手袋をはめるに惜しいダイヤなり
寶石は正札見とく丈けのもの
硝子切となつてダイヤが酷使され
此のダイヤ見て頂戴と云う握手
寶石商クレオパトラの額もかけ
ダイヤまだ同じ売物に並べられ
寶石の艶一年で消えかゝり
迷つた揚句もとのパールになりまし
しょうむない寶石はいや素手でお
寶石に縁のないのが見惚れとり
硝子玉とわかつた時はもうはらみ
寶石の価値は問われない形見なり
寶石が華燭に映えて祝辞聞く
寶石に世帯づかれをみすかされ
寶石の密輸ルートに眼がひかり
庸佑

寶石で女の価値を値踏みされ
帯どめのヒスイ女将の涙このみ
貞操を売つたダイヤで身をかわり
ライバルが宝石つけたのをくさし
寶石や真珠や女は高うつき
誕生石娘は夢を温める
寶石も妾しにや夢の飾りもの
遺言にない宝石へ眼が光り
春の陽へ誕生石をかざす幸
寶石が似合う娘の軽い咳
寶石を盗つたが売にちと困り
寶石で残せと金が出来かゝり
イミテーションのダイヤが光る虚栄心
寶石の土産は派手に輪をひろげ
大きさが所詮贗だと云うダイヤ
奥様の景氣ダイヤが光る指
待望を妻は小さくヒスイ買う
ダイヤ一つ女心の底を見せ
寶石の値段は桁を読み違い
皺くちゃな和紙へ宝石包んどき
誰からのものかルビーの手をかばい
潮花

南題「小唄」

市場没食子選

三味線と別に小唄を唄って居
声の良い小唄へ芸者寄つてくる
二次会へ課長の下手な小唄が出
爪びきの小唄を聞いて湯の煙り
母小唄娘はジャズに熱をあけ
吃るのを忘れ小唄のどの良さ
二次会になると小唄も撥にのり
かわきりに三筋に合わぬ小唄が出
蚊のなくような小唄春の雨
ぼたん雪小唄とかえる南の灯
オサライの小唄が洩れる露路の奥
小唄ぶつとり旦那が来てくれず
更年期小唄の一つ憶え出し
いさむ

奥さんの糸で小唄もいい調子
独酌ヘラジコの唄粹過ぎる
小唄などやれて十代見直され
アルサロへ来てても小唄をやめ人
色つぽい文句覚えて小唄去に
小唄はつたりお師匠はんに惚れ
二人きり小唄も嬉し四畳半
好きな小唄師匠となつて嫁き遅れ
猫板を叩く小唄へ調が付き
お経あげた口からいきな三下り
ちと小唄でもやり給へノイローゼ
三味線に合わぬ小唄へ畏まり
三味線をウロ／＼さる小唄が出
しょうもない小唄へ手だけ叩いさ
小唄会義理の拍手におだてられ
小唄も名取りになつた紋を染め
喘息のくせに小唄の踊りのと
のんびりと小唄になつた一人風呂
つきあいは三等社長として小唄
好い声の小唄我流の節廻し
辰始

南題「芝生」

西 いわを選

日曜の芝生で恋を拾つて来
摸擬店の芝生半分陽が当り
芝生の恋よ春の陽だまり
芝生また模型飛行機飛んで来る
毛氈の芝生へ鹿も寄つて来る
ビー玉が一つ隠れていた芝生
斗病の試歩許されている芝生
値を聞いて芝生当分やめにする
夜会服芝生に風が恰度よし
芝生今日大きなお尻やなと思
ボール一つ芝生へ忘れ暮れかゝり
愛のさゝやき芝生をむしりつゝ
かげろうが芝生に春をさゝやいて
寝ころべば芝生に春の香りする
三司

お知らせ

バックナンバー御入用の方は、往復
ハガキでお問合せ下さい。
川柳雑誌社

南題「チボ」

黒川紫香選

芝生もう春の彼岸の来た青さ
還暦を芝生へ連れて行くカメラ
黄昏の芝生に恋の香のこり
恋語る芝生も春の思をして
芝生から春風を切る球が飛び
足跡が芝生に残るかと思
チボふつと空の青さに氣をさら
チボをして近所の義理を足し
空財布川へ流してチボ寒し
刑事とは知らなんだチボくやしがり
背中の子氣にしてチボにひつか
チボに注意喚起するのにとやられ
我輩をするとはチボの大胆な
又チボに呑気な妻がしてやられ
スリ係刑事の方がスリに見え
くられた方がスリだと今判り
鈴つけたまの財布を握られて来
チボの足もう一仕事したらしい
かき分けて乗つた所で盗られ
大声でチボと云うて逃げたチボ
チボ或る日己れの財布を押さ
口笛を吹いてるチボのかせぎ高
チボ逐に千日前で挙げられる
チボとチボ難波の駅で亦出逢い
赤い羽根つけて日曜スリ出かけ
チボ見た間に財布すられて来
香具師の目にチボは三人居るのなり
今日チボも早う起きてる春日和
人の波チボもおなじ様に揺れ
紫香

川 小松支部結成句会 (石川県)

伊藤茶仏報

病歴を重ねて野心棄てられず 正明
野心家だつた話のはずむ通夜の席 久雄
女事務課長の野心知っていて 芳郎
ボナンザに野心をかける一週間 千里
あの頃の野心が事務の隅に老い 光郎
百万円貯める野心へ義理を欠き 恒雄
まだ捨てぬ野心を妻も子も嫌い 城南
政局の動き野心を捨てさせず 茶仏
産ぶ声を聞いて隣りが来る 素百々
産ぶ声に猫も鼠寝の夢がとけ 柳三
産ぶ声へ煙草一本つけ直し 草刃
産ぶ声をほめて産婆の手がせわし 古意知
産ぶ声を上げた店主で四角張り 一進
産ぶ声が聞えてきそう電話口 晁博
テストするつもり吾が子にテストされ 童心
テストしたように仲人もつて 曉人
優良児などと大人のテスト好き たつ路
条件は清更テスト受けてみる 味平
うっかりと三十娘にテストされ 香怪
軽る過ぎるテストに不安まだつづき 碩水
本番のつもりでやれと又キツス 茶の香
親の気も知らずテストも無邪気なり 酔羊
二次テスト自信だんだん消えてゆき 宗太郎
ぼんぼんやさかいに一丁かましたろ 雅城
大阪のと真中でど忘れる 千太郎
九番線梅田のネオンまだ消えず 正柳子

川 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

含嗽する喉女の視線ある 尙平
ウガイ薬持って精勤課長来る 鞍馬
夜の女夜の装いとはなりぬ 鳥雀

故郷の荷一家の視線つかむなり 秀徒
きつねうん自転車の荷の見える席 司郎
一本の煙に奈良の仏たち 幸男
煙の美しさを際の中から出している ゆきら
無視されたマツチ女の手にもゆる 紫蘭
冬海を想い白き魚を裏かえす 豊次
天井へ夫婦道かな事はなす 晴芽

川 倉敷支部句会 (倉敷市)

相原一善選

即金にせよと奥さん智恵をつけ 方大
開かれてからは市場になど行かず 谷水
相談へ必死になれと云うただけ 万古
初対面もう根性を見抜かれる 春日
落書の子供の面をうれしが 五茶
スタイルを云うて冬着を薄う着る 一善
即金で買えばいかにして呉れる 一念
只でやる様な市場の前景気 千代春
祝日の旗を子供に促され 麗水
着ぶくれて風邪を引いてる一人児 風の子
女手で必死に生きて息子ぐれ 明心
顔馴染やつぱり即金組でなし 承平
あの頃は必死でしたと未亡人 素夫
即金で払える値段まで値切り 素身郎
必死なる願い当選まであり 平平
市場籠提げて出たまゝ十三時 鈴ン坊
やせた父冬着が一番好きとみえ 真寄
平生の努力心死を尻目で見 隆文
色男必死の恋をもてあまし 桃仙坊
落書で社長に抵抗する社員 鳳月
即金に問屋頭をおさえられ 道友
落書は時に寸鉄人を刺し 無名樹
マークツ誘い合せて来て値切り 蔡丘
即金へまけると云えばまだ値切り 幽谷
美しい顔根性は別に持ち 陽子
喰うだけが必死と云うて株を買い 泰山

川 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

邪魔になる一升瓶を下戸はもち 太郎
邪魔な松切つて名所に残る唄 風塵
布団だけ出来て縁談まともらず 定男
ペンギンの夢を宗谷は呼び起し 蛙眠子
嫁ぐ娘の倅つつむ絹布団 進笑
いんちきの油に髪の色が褪せ 無閑
当選をしてから邪魔な選挙民 千柳
忙しい毛糸の玉へ邪魔な猫 けん坊
邪魔者のように勇退すすめられ 蘇生
手伝に來たが子供が邪魔になり 康女
傷心の涙をかくす掛布団 信坊
あと五分朝の布団をはなれかけ 吾柳
いんちきの工事が袖の下ですみ 詩郎
いんちきに勝つてきくらに脱れる 千三
愛の巢へ客の長居が邪魔になり 君枝
アベツクのさきやき邪魔なストロール 幸子
良縁が世間の噂に邪魔される 美喜枝
荷布団へへそくりたくす親心 庄太
逢引の電話に邪魔な笑い声 すみ子
邪魔が出て断念させた立候補 節枝
晩酌の亭主に小言邪魔になり 青香
いんちきの教祖へ生命縮めて居 愚球
いんちきに三國人と云う強み 雄々

川 備前支部句会 (岡山県)

浜田久米雄報

福引へもう百円を奮発し 葵丘
福の神だったか嫁が来て栄え 東岸子
幸福な新婚かわるがわる拗ね 幽谷
この人も耳の福相云うてくれ 久米雄
新婚え奈良の小鹿がつきまとい 伊久野
新婚の当座少うし義理を缺き 陽子

川 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山選

一本気なのが好きよと妓酌ぎ あや女
一本気の父へ家申気を合わせ 一声
一本気を信じて物をたのんどき 操
溜息をつけば親方煙草にし 幸仙
花よりも団子食気の本気 万女
汽車弁のうまさはずつく山つじ 竜泉
起されて夢のつづきを見る苦心 永流

品質優良
先チカワ
TACHIKAWA PEN
大坂市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社

酒汗水も涙もみんな水 青柿
大漁の唄海の面へよく響き 葵丘
海へ来て男の自信取り戻し 喜案
雪しぐれ追われて帰る貴い風呂 政人
今呑んだ命を海は知らぬ顔 周甫
待つ人の来る雪路を掃いておき たつよ
バスに積む初雪ビルの陽にとける 知恵美
化粧やけ水商売の過去をもち 薄仙
夕焼に染ってトンボ飛んで行き 十喜案
直ぐい気の雪に残った千鳥足 不老

海知らぬ分教場の貝細工
水ごりを取る妻といて恐ろしい
傷心が水の青さへ立どまり
七色の夢を育てるジョロの水
雄大な希望を空に見守られ
鉄窓の四角な空の星を恋い
療養の身を青空へとけ込ませ
水かれた花びんで菊が咲き初め
碧空の高さへ小さな悔を捨て
雨に濡れ雪に寒さを知るポスト
雪どけの道のハイヒールが行なやみ
山あいの水面に浮ぶ月の影
雨宿り恨めしそうな顔並び
水溜りへためらつてゐるハイヒール
春の陽へ汗かき初めた雪だるま
外は雨舞台は雪の赤穂義士
黄昏の海へ旅愁を捨てゝ来る
七面山

雑川 廣島支部句会 (広島県)

メエ／＼の毛並無惨に切りこられ
出すとこへ出す丈に取る診断書
平熱となつて出してる診断書
診断書患者の都合に聞いて書き
診断書見せて病気を信じさせ
あゝ受験でサラ／＼と診断書
診断書温泉行が認められ
診断書かわして吉日決められる
ホッピング携えてゐるのが一人
疾走の車遅けさすホッピング
薄氷に穴をあけてるホッピング
伸びる児のホッピングは骨を曲げ
ホッピングお山が見えたりかくれたり
お帰りと躍びこび出て来るホッピング
ホッピング狭い露路まで占領す
雨降りに軒で飛んでるホッピング

美砂 美舟 只世 千年 流風 承平 笑雷 喜久枝 竜児 水雲 たまの 軽部 十七文 痴人 孤人 南鉦 七面山 休選 俊児 鷺生 愛鳩 雀子 春江 順橋 高進 鷺生 同光 思伸 三夫 越舟 美樹 陸三

雑川 高知支部句会 (高知市)

何時休むのか車掌の声澄んでいる
こちらから礼を云いたい良い車掌
新米の車掌に早い次の駅
平服の車掌はバスの隅に立ち
制服を脱げば車掌の国なまり
にやうと笑えばぞつとする心理
表彰に皆んな笑顔の豆銀行
何笑つてゐるのか気になる事があり
てれたのをごまかす為の高笑い
引揚げの笑顔涙にゆがんで来
送られた笑顔に今日を励まされ
へんて餅のふくれへ皆笑い
要領を得させず大物笑ろて立ち
微笑んで向えば微笑み返つて来
退院の母本当の笑いが出
三カ日叱らず笑ひに努力する
すき焼の仕合せに子が食われ
すき焼へ箸と箸とが衝突し
すき焼のお残り犬にやる暮し
お隣りはすき焼匂いで我慢する
お隣りのすき焼子供が先に知り
電熱のすき焼団扇を使いたく
寒いからすき焼にしようかどうしよう
呑めぬのか一人すき焼追加する
差し向いすき焼の味恋の味
すき焼に一本欲しい窓の雪
すき焼の鍋伏せたまゝ職もなし
すき焼の組へ社長も今日は入り
すき焼へ酔うてゐる氣と酔ひる氣
すき焼へ迎えた先生如くなし
すき焼はお隣りだったああしんど
すき焼の匂いによろけるグラカード

大西迷窓選 梅林 健雄 子似家 竹比呂 一周坊 光太郎 信夫 美之子 寛 智賀子 海鳥 康之介 俊江 蘇水 周治 博子 一枝 白秋 留子 雅子 草舟 庄吉 英太郎 未遂 昌男 醉雀 蟠蛇 勝龜 茶々々

雑川 篠山支部句会 (兵庫県)

消印の日まで頑張るクイズ狂
消印で二人相互にうなづける
消印が又も変つた極道者
消印を見せようです払うて
消印で指名犯の住所追
消印は予定のコース廻つとり
ボンボンボン消印春の音で打ち
色あせた消印今日はものを云い
消印で死んで居らぬ説になり
コンビも片方が今日も酔つて
曝天下同志でウマが合うコンビ
終電へコンビの肩がもつれあい
お上手ねはめれば母のひざにより
運転が上手になつて事故起し
お上手の声へ園児は胸を張り
勧誘は上手にそこへもつていき
やりくりも上手になつて妻はあけ
出前持の方が上手によけてくれ
世渡りも上手小さな貸も出来
銀行でボンボン消費された百万円

迷窓 肇花 虚空洞 千草 初音 柳常 左文字 文平 無聖 ひか平 一風 一雨 永断 初穂 桃村 凡志 夷 よし子 越山 無鬼 野村味平選 武富 昌男 光郎 恒雄 久雄 明石 醉羊 素百々

雑川 大聖寺支部句会 (石川県)

砲煙の匂い残して基地を去り
良い匂いさせて襟足汚れてた
捨てかねて母は匂いをかぎ直し
帰省して我が家の匂いになつかし
焼鳥の匂う屋台がボーナス日
世話人をいたわつて出す寄付の金
お近所はいかほどですかと寄付をきき
寄付になる話で一人二人立ち

雑川 貴生川支部句会 (滋賀県)

中島可十選 恐妻家立呑みて辛抱して帰り
立呑みの中に沈んだのが一人 夢生

色紙短冊
書畫用品
大坂丹波
丹波堂
を申せしを

雑川 宇部支部句会 (宇部市)

津秋六花報 寄付の高横から妻に小突かれる 味平

立呑みの私服と知らず口が過ぎ可
立呑みへ日給ばかりの顔が合い俊子
罪のない寝言に夜なべの手を休め輝子
クラス会予算が狂う三味の音美秋
下関支部句会 (下関市)

石川侃流洞報

よこなぐり鼻汁かんだ子のすまし顔 ほんみ
週末の疲れをほぐす妻の酌 陽子郎
すまし顔まだ格式が捨て切れず 成理智
山分けの一人不服の仲間割れ 千里
ふるさとの汁粉へ葉の葉がはる 藤四郎
山分けにした空箱をねろうてる 半休
土曜日の会議は早く打ち切られ 伊三男
山分けで片棒かついだ見張番 一規
腹具合聞きつゝ汁粉子に注がれ 茂美
葉書一ぱい墨黒々と子の賀状 吾天坊
うつかりと値切った植木もて余し 雪峰
万感の思い辞職の墨をすり 蘇人
小説と割切つていて腹を立て 九呂平
革命のようにこぼれた赤インキ 木陽子
値切らずに買つて何だか損した気 成夫
別々の切符で土曜駅を立ち 鳥石
値切り役祖母にまかして買ひに出る 吞喜坊
山分けにするのが惜しい欲を持ち 古子郎
惚れている弱身汁粉へつき合う日 晃
酒乱とは思えぬ朝のすまし顔 司楼
年の瀬をピアノがもれるいゝ生活 竹涼
お汁粉の組にも幹事立ち廻り 吐泉
赤錆びているかも知れぬ老に入る 蜷松
赤だすきかけて乙女の公休日 花子
山分けと兄貴にチヨッパ誤魔かされ チエ子
いゝ年を迎える露地の杵の音 侃流洞
三越の正札値切つて見たくなり かつたる

木次支部句会 (島根県)

松江支部句会 (松江市)

勝谷山川兄報

延着がバスの時間にまでひびき 舞吉
隣県の雪を延着もつて来る 通児
延着の奴が会議をかきまわし 一兆
ひと一人ひいた延着とは知らず 与根一
飲告の線から外れた生字引 ふる児
字引にも無い字もあつて祖母の文 紫葉
落書のようにか見えぬピカソの画 孤呂二
落書は健康 そうな療養所 山川兄
落書を心の中に書いて消し 三雷波
正面をにらむ組閣の御歴々 祥月
芸術と云い正面を撮さぬ気 長丘
正面をあけて故人を偲ぶ宴 英城

大阪通信病院川柳会

麻生路郎先生選

口止め料次第でつせとおどかさ 愛論
口止めをしないと肩をポン打ち 春巢
口止めされたといふゲーム一杯注ぎ ハナ子
口止めをされた口止めてしるべり 竹莊
京の冬布団の中で聞くみぞれ 没食子
うたゝ寝の蒲団文句で着せられる 草右
かけふとんだけで寝ている二日酔 幸男
トラツクに今宵の夢の一とながれ 凡平
ふとん見て税吏も逃げた生活苦 静夫

宮林川柳会 (大阪市)

麻生路郎先生選

小包で札束をととどけとき 康彦
札束に十代の命軽く捨て 無愁
持ち逃げの札束茶屋の酒を吸い 方正
札と云う奴は裸へ帯をしめ 風船堂
銀行員札束らしくあつかわず 蔭児
札束の魅力に勝つて終電車 桃村
札束へ震うたことは云わぬなり 路郎
前借り顔貸してやるお人好し 阿茶
借りたおし借りたおし生きている とし代
借金があつて月日が早くたち 一伸
白髪染若い燕に見つけられ 一哲
若返りの話しへみんなよつて来る とし代
かくして若妻も若返り法読んできた 比呂史
くたれた顔へネタタイ丈け派手な 生々庵
かき捨ての楽しみもあり伊勢詣り 珊枝郎
折角の二見ヶ浦は雨にわけ 阿茶
ぬかつけば今大廟の風静か 生々庵
偵太郎がりでかしこむ伊勢参り 同
松の内三毛もお重のものもらい 瑞川
湯の街はどてらで年賀交わされる 生々庵
正月の花だ花だと気を配り 阿茶
伏屋にも一月一日の陽の光 太希志

みおつくし川柳会 (大阪市)

ガラス玉真珠に見える社長ピン 花香
おもむき大きくゆれて年を取り とし坊
ひめくりの厚味何やら出来さうで 凡九郎
拾い屋になつて嬉しいお元日 清恵
思惑の通り運んでこわくなり 正斗
えゝことがおますようにと初詣 歌
出初式しぶきも半分うけてくる 日路志

333 川柳会 (堺市)

川村好郎報

景気の良い話をして貸してんか 狂二
労基法無視されがちの好景気 圭水
車座へもう花婿は割つて入り 一楽
車座になつて花代気にかゝり 素男
車座がぐつとちぎまるいゝ話 高志
言訳も理屈になつて叱られる 南宗
負けかけた理屈を年のせいにする 千里
噂の主来たが車座気が付かず 好郎
先生が一人しゃべつて懇談会 貴山
往診を頼めば医者も風邪ごもり 冗歩
待ちぼうけ風邪もあなたにされ 梅里
車座の一人定年制不服 雄声

季節一品料理

江戸前にぎりずし

アベノ橋地下映画食通街

梅里の店

大萬

★大万川柳 (第七十四回) を募る

兼題「隠し芸」路郎先生選

締切・四月十五日 切歌五句以内

発表・四月廿一日 (店內発表)

投句は 阿倍野区松崎町三丁目

一〇 大万川柳会宛

らか室集編



— 路 郎 —

★街には金魚掬いの商売がはじま
った。郊外電車は花見客の誘引に
忙しい。編集部も桜の下へ机を移
したいような気分におそわれてい
るので、しばらくやらない吟行を
やって見ようとひそかに企画をし
ている。今のところ、日は四月十
四日で道明寺天満宮の桜を見て、
古市の軽の里の「ふるさと」(鬼
醉居)に落ちつき、ここの庭園の
桜を眺めて句箋を展開させようと
云うスケジュールである。吟行希
望者にだけ案内状を差上げるので
ハガキでも電話でもいいから連絡
して欲しい。道明寺は文化の神様
菅原道真の叔母さんが住んでいら
れたとて、「ふるさと」は大和の
代官邸を移した建造物で豪華な庭
園があり、一日の清遊に好適のと
こだ。

★句集「私達」の出版記念会の記
事を本号に入れるのと、私にいろ
んな会合が多すぎたので、編集に
少しズレが来た。編集主任がイラ
／＼しているのがよく判るが、ど
うすることも出来なかった。次号
でウンと取り戻したいと思ってい
る。

★「きやり」に「番傘」や「川柳

雑誌」が坂澄風氏の葬式の日に
「さつき」へ合併を申込んだとや
ら込まぬとやらと云う記事が載っ
ているそうだが、「川柳雑誌」は
同人雑誌でないから、同人雑誌と
の合併など考えて見たこともない
し、寒い日だったし、多用でもあ
ったので焼香が済むとすぐに引下
がったのである。

厳肅な告別式場で突つ立ったま
まそんな非常識な話が出るもの
か、出来ないものか、考えるまで
もなからう。むしろそんなネツ造
記事掲げて「きやり」の品位を
傷つけたに過ぎない。とすれば
「きやり」にとつて大きなマイナ
スだと思ふがどんなものである

★ホノルル市のフォート街のクイ
ン・ペレタニア街間に長さ一マイ
ルのリボンが出現、それへ通行人
が次ぎ／＼と紙幣を貼つてゆく
がヒラ／＼と飄っているそうであ
る。これは小児病基金運動として
行われているのだ。日本の赤い羽
根運動と比較して、何んとかくノ
ンビリした感じがしてうれしい風
景である。日本だったら貼ってゆ
く後から千裂って行くかも知れな
いと思ふと寒くなる。

★野口雨情を映画にした「雨情」
の試写を見せられた。尤も伝
記でなく、創作であることわわ
であるが、詩人を表現する技巧の
むずかしさがよく判った。詩人の
すべてが世俗にうといということ

は云えるであろうが、雨情の場
合、少しスリが利きすぎたよう
だ。しかし森繁の演技の巧みさに
は敬服した。

雨情とは古い友人だったので、
「雨情」を単なる映画として見る
ことが出来なかった。死ぬ一、二
年前だったか、その辺はハツキリ
覚えていないが、土佐堀の京屋
(役者の経営していた旅館)で会
ったのが最後だった。その時、九
谷の猪口(金沢で求めて来たも
の)を持って行って進呈したら、
麻生君、僕は近ごろ酒をやめてい
るんだと云つて、あの人なつっこ
い眼で盃をながめていた。呑めな
くていいから持って帰つて呉れと
云つて、手渡した。そしてビール
を呑んで別れたが、それが最後だ
った。私は映画を見ながら、六甲
ホテルで一緒に泊つたこと、私の
阪神時代に來てくれたころのこと
を回想して快よい夢を趁うてい
た。川柳家はこの映画を是非見て
欲しいと思ふ。

飛燕往来

★築山快夢起氏(ホノルル市)

より

— 路 郎 宛 —

二月十九日付御書拝見、新年匆
々御疲れのため臥床されましたが
元氣になられ御忙しい毎日を送つ
ていなさる由、精々御自愛の上、
祖国柳壇のため頑張つて下さい。

渡日の節、お目にかかった尾崎方
正さんがいよ／＼四月には御渡米
なされ、往途ハワイへ御立寄にな
るそうで、ワイロー社員一同にて
心からの御歓迎申上たいと思つて
居ます。ハワイへの到着時間、滞
在日、JALかPANかその辺決
定次第御通知下さい。奥様の「菜」
の選評入手しました。今ハワイで
は温度六十度前後にて晴れた日な
ど故国の秋を思わせる快適さで
す。宅の庭に写真の様な極楽鳥と
申すのが咲いて居ります。一寸珍
らしいでせう。不取敢御返事ま
で。

— 三月一日

★渡邊伊津志氏(巡視船かささ
ぎ)より

— 路 郎 宛 —

前略句集「私達」十四日拝受、
名句は勿論鮮明な印刷紙質に映え
て毎晩ベッドで楽しく繕いて居り
ます。有難うございました。愚生
船内で文化部長をしている関係
で、利用するわけではないのです
が川柳講座(轡越にも)を開いて
居ります。当庁は運輸省の外局の
関係上、富安風生、菊吉両先輩の
下俳句塾が盛んですが、若いもの
は川柳の方が面白いといつてワッ
チ中の無電室へ来て邪魔をしま
す。船内居室階段降口にある黒板
に三、五句書いて居りますが屋敷
時はこの歌句を口誦んで批評して
くれます。「そんなに云うなよ、
局長の川柳調でいうて見てみい」
等と、図らずも船内融和に役立っ
事もあります。(以下略)

遊山にはヒョウタン印の酒

銘酒

お父さんの
牛乳

は 牡丹 白 銚子瓶



攝津酒造株式会社

「旅人」や「福壽草」と一緒に川柳書架を飾っていただきたい

待 望 久 し き

川柳不朽洞会会員句集

選集 路郎

私 達

定価三百五十円
送費 三十二円
菊半型・函入

本書は限定出版故この機会を逸したら再び手に入らぬもの
早くも残部が僅になりましたから 割申込まれたい

発行所 大阪市住吉区万代西五の二五
川柳雑誌社

電話 住吉(07)六〇八一
都賀口座大阪七五〇五〇番

川 雑 婦 人 友 の 会 會 員 を 募 る

どなたでもいつからでも入会出来ます
会員の作品は「金泥集」に掲載!

会費一カ年百廿円

大阪市住吉区万代西五の二五 川柳雑誌社内
雑 婦 人 友 の 會

会 長・麻 生 霞 乃

お買物は近鉄へ



アベノ土六
近鉄
大 阪

スマートで
着心地のよい

O.S.K.の
レディースード

株式会社 大坂商店
大阪府大阪市東区東一丁目二番地
電話 東(94)1745・1563番

何を選んでいただくか
は先様におねがいして
タカシマヤの商品券を
お贈りするのにも 心に
くい贈物かと存じます
一〇〇円から
一〇〇〇〇円迄
大阪・東京・京都
3店に共通です



大阪・なんば
東京・日本橋
京都・四
高島屋

募 集

課題吟募集

秀才 (廿句以内) 市場没食子選
インキ (廿句以内) 黒川 紫香選
(四月二十日締切)

代人 筆 (廿句以内) 尼 緑之助選
相 (廿句以内) 富岡 淡舟選
(五月二十日締切)

毎号募集

近作柳樹 雑誌廿句以内 麻生路郎選
川柳塔・雑 詠 北川春巢選
文章(評論・研究・感想其他) 柳生路郎選
(毎月二十日締切)

投稿規定

▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
▼ 『近作柳樹』は一般作家の雑吟を募る。
▲ 『課題吟』は誰でも投句が出来る。
▼ 『川柳塔』への投句は不朽洞会員に限る。

B列5号 毎月一回一日発行
川柳雑誌 第十二巻 第四号

定価 五〇円
(送料四円)

(転載禁)

半年年 三二四円
一カ年 六〇〇円

昭和三十二年三月廿五日印刷
昭和三十三年四月一日発行

大阪市住吉区万代西五丁目二五番地

編集兼発行人 麻生 幸二 郎

大阪市住吉区万代西五丁目二五番地

発行所 川柳雑誌社

電話 大阪 六〇八一
都賀口座 大阪 七五〇五〇

THE SENRYU ZASSHI

NO. 359

Published monthly by Senryu Zasshisha, Osaka, Japan.

不眠の
昼間療法!
☆風はすっきり...!
焦燥感、不安感がとれ
頭脳明セキ、能率は増進
☆夜はぐっすり!
風間の服用だけで、催
眠剤なしに安眠できる。

神経症治療剤

ハクタン

山之内

東京・大阪 山之内製薬株式会社 福岡・札幌

春になって、第一番に気になるのはお髪です。カユミ、フケにお悩みになるのも亦この頃です。洗ってみても、梳いてみても、なんともならない様なことはございませんか。こんな時にハツキリとお悩みを解消するのは、三共のヨウモトニックです。

三共の本格的養毛料
(強力女性ホルモン入)

ヨウモトニック

フケ・カユミ・抜け毛・スス毛・若葉の防止・美髪保存に
¥150、¥200、¥420、¥1,033、

男子専用の化粧水

三共アストリンゼント

ひげ剃りあと・洗顔・剃入 後にサツとひと撫で気分快進この上なし (¥150)

麻生路郎先生著
川柳とは何か
—川柳の作り方と味い方—
川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・鳴咽—そうしたもろもろが十七音に圧搾された諷刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的であるその川柳がいかになして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味い方は—以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区払方町27 振替東京29507

一家そろってホーライ党



廣東料理

蓬萊

大阪なんば・TEL 64 551—2